Tsukuba Urban
Transportation Center

TUTC Library—26

平成11年6月

●座談会

つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について

21世紀つくばへの提言　シリーズ 9

Tsukuba Urban
Transportation Center

TUTC Library—26

平成11年6月

●座談会

つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について

蓮見　孝
（座　長）

藤澤　順一

小関　迪

おそど　まさこ

ルイス・ロバート

森岡　悦子

敬称略

「21世紀つくばへの提言」シリーズについて

日本は今、新しい世紀を間近かにして、高齢化、情報化、国際化、環境問題、地価問題等々、社会経済を基盤からくつがえす大きな転換期を迎えようとしている。

一方、つくばにおいては、研究学園都市建設事業が着工以来30数年をへて、公共交通機関の未整備等、多くの課題を残しながら、漸くその熟成段階に至った。また、常磐新線や圏央道の計画は実施に向けて次第に具体化し、その大規模沿線開発と併せ、つくばは更なる発展が期待されている。

今、このような状況を直視し、これからのつくばの都市建設のあり方について、その基本にたち返り、議論を広げ、かつ深めることは大いに意義あることと思う。

座談会
つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について

●

日　時：平成11年2月23日

●

場所：筑波第一ホテル　明星の間

●

座談会出席者

座長・蓮見　　孝（筑波大学芸術学系助教授）
藤澤　順一（つくば市市長）
小関　　迪（筑波記念病院院長）
おそど　まさこ（トラベルデザイナー・移動福祉専門家）
ルイス・ロバート（筑波研究コンソーシアム常務理事）
森岡　悦子（つくば市教育委員・社会福祉審議会委員）

敬称略

ごあいさつ

大　白　　財団法人つくば都市交通センターの大白でございます。座談会開催にあたりまして、ご挨拶をさせていただきます。

私ども財団法人つくば都市交通センターで取り組んでおります業務は大きく次の３点になります。

１つは、「筑波研究学園都市」のなかで、約90haに及ぶ「都心地区」の交通の円滑化を計るための駐車場整備と管理であります。これら駐車場は、公共的・共同駐車場でありまして、発生交通量に見合う規模の整備を適切に行う役割があります。

２つ目は、交通に係わる調査研究業務であります。これには公益活動として必要な自主調査研究もありますし、ノウハウをお求めの機関からの要請に応じた受託調査があります。

３つ目は、広報、啓蒙活動や地域社会活動への参加というような公益活動であります。

この３つ目の活動の一環として本日の座談会が位置づけられております。その成果はＴＵＴＣライブラリーというシリーズを発行いたしまして、今回は第26巻になります。

今回の企画は『つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について』をテーマに取り上げました。ご承知の通り、2015年には国民の1／4が高齢化階層に突入することになります。この高齢社会ですが、７％になると高齢化に向かう前期高齢社会といわれております。それが14％になると、後期高齢社会となるということになり

ます。

日本では1995年に14%に達しておりまして、この前期から後期に至る間、前期に入ったのが1970年ですから、わずか25年で後期高齢社会に入ったことになります。これを外国と対比してみますと、フランスではちょうど日本と同じ1995年にこの14%になっています。しかし、ここに至るまでにはなんと130年 かかっています。また、アメリカでは70年、イギリスでも50年の時間が与えられておりました。つまり、それだけ時間をかけて社会のシステムづくりに取り組むことができたということであります。

今後わが国では高齢社会への移行がさらに加速されますが、備えが各種にわたり、未整備であるため、山積する課題を広く議論し、取り組みを強化することが急務であると考えます。私ども財団は、この問題に強く係わりをもっております。

したがいまして、改めて幅広な議論を出発点として、今後しっかりと取り組みたいと思いますし、また、広く議論を触発する一端となればと考えたことが本企画の動機であります。

幸い、「つくば」は非常に若いまちであります。まだまだまちづくりが進行中のまちであります。その意味からも、今回この座談会を開催する意義は大きいものと考えますし、またそうなって欲しいと願っております。

そこで、今回このテーマを議論するにつきまして、大きく２点の視点があります。１点目は一般論として社会全体としての高齢社会への課題を、もう一度議論しておく必要があるだろう。２点目は地域特性による課題であります。例えば、過疎化傾向にある地方都市

の高齢化問題、大都市の問題、それから「つくば」の問題。これらはそれぞれの地域特性がありまして、その内容・質も異なります。また、それらに対処する処方箋もそれぞれ異なるかと思います。

今回は特に、「つくば全体の将来はどういう姿になるのだろうか」、それから「県南の拠点都市として、中心市街地はどういう姿になっていくのだろうか。今、どのように対応していくべきか」ということに議論の厚みがおかれれば幸いと思います。

今日お集まりの先生方からいただくいろいろな議論は、先ほど紹介しましたように、ＴＵＴＣライブラリーに収録いたしまして、参考資料として広く関係の方々にお配りしたいと思います。また、ＡＣＣＳさんのご協力によりまして、ビデオ撮りをいたしまして、後日放映させていただきたいと思います。

本日の座談会が今後広く、問題の提起、あるいは議論のきっかけになれば、たいへん幸いだと思います。また、私ども財団のこれからの取り組みの参考にさせていただきたいと思います。

本日は夜遅くまでの時間にわたりますが、なにとぞよろしくお願い申し上げまして、冒頭のご挨拶とさせていただきます。

座　談　会

蓮　見　　ひな祭りも近づき、だいぶ春らしくなってまいりました。今日は『つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について』をテーマに座談会をすすめていきたいと思います。私は座長をおおせつかりました、筑波大学芸術学系の蓮見と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日のタイトルなんですけれど、とても長くて難しそうなテーマですね。このテーマに対して、「お題をいただきましたので、それでは」という形で、考えを述べていく、いわば落語の「笑点」のようなすすめ方もあるかもしれません。けれども私は、「高齢社会だからどうするか」という「傾向と対策」のようなものではなくて、「これからの私たちのまちづくりをどうしていこうか、どういうふうにしたら、私たちが暮らしやすいまちになるんだろうか」という「取り組みがいのあるビジョンを、“高齢社会”というキーワードを切り口にして語り合っていく」という進め方でいきたいと思っています。

ですから、あまり肩肘はらずに、打ち解けた雰囲気の中でのびのびと発想を拡げていくことができればと思います。今日初めてお会いした方もいらっしゃいます。“一期一会”という言葉がありますけれども、「今日初めての出会いが、最後の出会いかもしれない」ということで、たまたまの出会いを大事に、有意義な時間にしていきたいと思

っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今日お集まりの皆さんはそれぞれの専門分野のエキスパートでいらっしゃいます。社会的にも市長とか、代表とか、博士とか、厳しい肩書きをお持ちなんですね。“助”なんていう肩書きは私だけということもあり、今日は肩書きという垣根を取っ払って、みんな同じ目の高さで、フランクに語り合うためにも、お互いに“さん”づけで呼び合うことを提案いたします。ぜひご協力いただければ幸いです。

それでは、まずご出席のみなさんをご紹介したいと思いますが、これは本来座長の役回りでございます。しかし、これからの時代、あまり一人が全体を取りしきるのではなくて、個々人が個性的なメッセージを発信し合っていくことが、とても大事なことのように思います。ですから今日は皆さんお一人お一人から自己紹介をしていただけますでしょうか。つくばとのかかわりとか、お仕事のことなど、なんでも結構ですので一言ずつ皆さんの“人となり”が分かるような自己紹介をお願いいたします。今日の並びは順不同になっておりますので、まず、お名前を私から紹介させていただきます。

最初に森岡悦子さんです。つくば市教育委員、社会福祉審議会委員、「つくばボランティアバンク」の代表をなさっていらっしゃいます。森岡さん、一言、自己紹介をお願いいたします。

森　岡　　森岡悦子と申します。つくばに住みまして、この4月で21年になります。個人的な問題から、「障害を持った人が、この新しいまちでどういうふうに生きていけるのか」を皆さんに考えていただくような立場で、この地域とかかわりを深めました。民生委員、社会福祉審議委

員等、さまざまの福祉にかかわる中で、つくばで今日まで育てていただいたと思っています。

“高齢社会”については、私がいちばん年齢的に近い課題を与えられたと思って、主人と私のことをよく見てお話しすればいいのではないかと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

蓮　見　　続きまして小関迪さんです。筑波記念病院の病院長でいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

小　関　　私がはじめてつくばに来ましたのは昭和51年、筑波大学の付属病院ができる数ヵ月前です。筑波大学では循環器内科を専攻していたわけですけれども、その当時はつくばに救急病院がひとつもなかったんです。筑波大学のある教授がクモ膜下出血になったときに、結局このつくばの中で引き受ける病院がなくて、救急車でどんどん東京のほうに近づいて行って、結局のところ東京の病院に入ったということがありました。

筑波大学の基本方針は大学病院として研究・治療・教育に専念するという、非常に立派なのですけれども、救急医療は他のサテライト病院で行うという方針でしたので「救急」という部門がなかったわけです。私も心臓の患者さんを相手にしているのですが、「慢性期の場合にはしっかり診ることができるけれども、急に増悪したときにはどこ

か他の救急病院に行っていただきたい」ということになってしまいます。ですから、自分の体力が残っているうちにと思いまして、昭和57年、45歳のときに、救急からリハビリテーションまで完結する病院ということで筑波記念病院を設立しました。

その後、健康推進センターである「つくばトータルヘルスプラザ」とか、ごく最近は老人保健施設（つくばケアセンター）などをつくりました。はじめは急性期の救急病院を一生懸命やろうと思ったんです。けれども、やっていきますと、どうしても「福祉と老人問題」は医療から離すことができないのです。ですから、そういう方向にも手を伸ばし、最終的には私自身が入れるような楽しい老人ホームをつくって――そのときまで命がもてばですけれども――そこに入って農業をやったり、同年代の方々とラーメン屋さんとか何か商売をしながら残りの人生を送ることができれば、私としてはいちばん幸福かなと思っております。

あとで申し上げますけれど、やはり若い人たちの体力づくりと、人間づくりが非常に必要だと思います。実は筑波大学の体育学系のある先生と「鍛練塾をつくろうか」という話をしていて、まだそれが実現していないんですけれども、その発端となったちょうど昭和53年ぐらいに、つくばの少年たちのサッカーチームを――私はサッカーを全然できないのですけれども――つくりました。それが今、大体２千人から３千人に広がっていると思いますけれども、そういうことで「健康」と「救急」と「福祉」と最後に「老人ホーム」ということができれば、

私としては非常に嬉しいと思っております。

蓮　見　　３番目はルイス・ロバートさん。筑波研究コンソーシアム常務理事でいらっしゃいます。よろしくお願いします。

ルイス　　ルイスと申します。私が生まれ育ったところはアメリカのカリフォルニア州のサンディエゴ、その後大学はサンフランシスコにあるバークレー大学に行き、その後しばらくの間研究をしました。日本に来たのは1986年で、1986年から1990年までの間、科学技術庁の研究プロジェクトに参加しました。

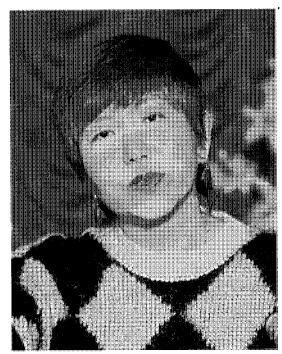
その後は筑波研究コンソーシアムにて研究から経営関係の仕事になりました。関心があるのは国際関係のことで、研究開発、ハイテク関係などに興味があり、できるだけ筑波研究コンソーシアム内でハイテク企業の支援、そのハイテク企業の間の交流などの活動を行っています。その関係で１年半くらい前に自分で会社をつくりまして、世界的な規模でハイテク企業への支援、情報収集提供というサービスをインターネットをベースにしてすすめており、今年中にできれば立ち上げたいと思います。

今日、私の役割は専門的な高齢関係ということではなくて、たぶん外国人の立場からの見方がいちばん重要ではないかと思います。「アメリカではどうなっているか」、また、「日本でこの12年間経験したことからどう考えているか」という意見を言うことが、私の役割だと思

います。よろしくお願いします。

蓮　見　　そのお隣りはおそどまさこさん。フリーランスのトラベルデザイナーでいらっしゃいます。それから移動福祉専門家で、株式会社「地球は狭いわよ」代表をなさっていらっしゃいます。今日は遠く八ヶ岳のほうからお越しいただきました。わざわざご出席ありがとうございます。

おそど　　八ヶ岳南麓の標高1000mで暮らしはじめてから13年目になります。つくばは今日で2度目です。茨城の水戸に行ったのも1回で、海外に多く出ております。20代の頃は、地球一人旅を勧めて、ガイドブックなどを書いておりました。29歳で子供を産んで、それ以降は子連れ旅も勧めるようになりました。



40代を過ぎた時に「自分はこれからどんな旅をしたいかな」と考え、「私は大好きな旅を一生続けたい」と思いました。「死ぬ直前まで旅を続けるためにはどうしたらいいか」と考えたときに、「体に障害をもって旅をあきらめるのではなくて、障害をもっても旅に出られるようにしなくてはいけない」と思いました。

新聞に原稿を書いたり、本を書いたりしておりますが、それだけでは社会が変わらないので、4年ほど前から障害をもった方の海外ツアーを企画するようになりました。この2月に、フィンランドの大変寒

い、マイナス40度の北極圏にオーロラを見に、障害をもった方などを含めて20名で行って来ました。これまででご一緒した人はトータル307名になり、また海を越えた盲導犬が29頭になりました。

海外に出ると、日本で私たちが常識と思っていることが決して常識ではなく、また「不可能だと思っていることが案外できるんだな」ということを感じます。そういう現場でつくられた発想で進んで来ておりますので、今日の私の役割は、つくばの外の考え方や日本以外の事情を話して欲しいということだろうと思って、自分なりに存分に話したいと思います。よろしくお願いします。

蓮　見　　次に藤澤順一さんです。おなじみ、つくば市の市長さんでいらっしゃいます。よろしくお願いします。

藤　澤　　今日ご出席の皆さま方の中では、私は生粋のつくばっ子だと自負しております。つくばのからっ風に吹かれながら、今日まで58年の歳を重ねたわけでございます。38歳の時に県議に立候補いたしまして、17年間議員生活を送らせていただきましたが、市長に就任いたしまして、はやくも、折り返し点を過ぎております。私はこのつくば市を民主主義の先進都市にしたいという一念で日々努力をしているのでございます。どうぞよろしくお願いします。

蓮　見　　皆さん、どうぞよろしくお願いします。さて、危うく忘れるところでしたが、私も自己紹介をしないといけませんね。蓮見でございます。私は8年前につくばへやってまいりました。その前は20年間デザイナーとして自動車会社に勤めておりました。会社のデザイン・セッションは、超機密部署だったものですから、まるで“鉄格子の中の世界”のように社会と直接リンクする仕事は少なかったのです。

けれども、開かれた大学である筑波大学にやってきましてから、つくばのみならず茨城県下の、いろいろなところに多くの友達ができました。そういうことで、楽しく充実した、ちょっと忙しい毎日を過ごしております。1995年から3年間にわたって茨城県地域産学官共同研究事業というプロジェクトに参加する機会を得て、高齢者支援機器としての電動車椅子、あるいは電動三輪車のデザイン開発にたずさわり、高齢社会の問題とか、福祉問題に多少触れる機会を得ましたが、福祉関連ではまだまだ素人でございます。今日は皆さんからいろいろ貴重なご意見をいただくなかで、私自身もおおいに勉強してまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

それでは、時間も限られておりますので、早速話し合いをすすめていきたいと思います。

Ⅰ．“高齢社会”とは

今日のテーマの中にあります“高齢社会”というキーワードに注目して、この言葉が表している概念とか意味について、それぞれ皆さんのお考えを述べていただいて、高齢社会に対する私たちの意識の共有を図っていきたいと思います。

それでは、森岡さんからお願いいたします。

多様性がある高齢社会、負の側面を強調し過ぎでは

森　岡　　秦の始皇帝の時代から“不老長寿”が夢だったと聞いております。今、まがりなりにも長寿社会に到達した時点で、私たちは何か漠然とした不安感のようなものを感じております。

それは、メディアからどんどん流れてくる高齢者の実態ですね。高齢社会イコール老人問題というように、高齢者の施設の現状とか、痴呆、あるいは徘徊するお年寄りの介護の大変さとか、それぞれの生々しいニュースに目先を奪われて、全体を見ていないような気がします。もっと、「延長した人生をどのように生きたらいいのか」とか、「高齢社会によって何がどのように変わっていくのか」を考えていかなければならないのではないかと、今回のテーマを与えられて思いました。

今は、高齢問題の負の側面が強調されている時代ではないかと思います。

ギリシア・ローマの時代から、老いることの正と負の両面が議論さ

れ、プラトンは“敬老”を主張しました。「人間の本質は肉体ではなくて、魂である」と。「魂をとぎ澄まされていく過程を老いとみると、高齢者の価値が世の中に生かされなければいけない」という論を出したそうです。アリストテレスは逆に「老いさらばえた姿が汚らわしい」とか「役にたたない存在だ」と論じたそうです。

今、負の側面が強く語られているということは、現代社会の激しい変化の中で「3年前につくられたコンピュータの機能がもう時代遅れだ」という感覚でお年寄りを見ているからではないでしょうか。

ここにアメリカの高齢社会研究家が言った言葉があります。

“老人恐怖症”その内容は「65歳以上はみな年寄り、そして病持ち」と、それから「非生産的で社会にとって無用の存在」、また、「それぞれ個性がなくて、みんな魅力のない人間」、その上「知的にもどんどん退化している世代だ」と。このひとつひとつの現実を見ていくことが、私の高齢化につながるのではないかと考えました。

少し長くなりますが、「65歳以上はみな年寄り」だという感覚ですね。これは1956年に国連が全人口の7％が65歳以上だという報告で初めて年齢を出しました。当時は平均年齢が男性が63歳、女性が67歳ですから、その線は妥当ですが、今どんどん状況が変わっている中で、いまだ65歳という基準がまかり通っているところに多少違和感を覚えます。

「旅に病んで、夢は枯野を駆けめぐる」と亡くなるときに詠んだ芭蕉は50歳でした。頭巾をかぶって杖をついている「芭蕉翁」というイメージは、今の50歳の男性と合致しません。

還暦記念にヒマラヤ山脈の6,000m級の山に登頂を果たした女性3人

のグループがありました。定年退職後、医師をめざして勉強し、国家試験をパスした男性も新聞に載りました。77歳の宇宙飛行士も誕生しました。このような時代に、65歳という年齢も少し個人差をもって考えなければいけないのではないかと思っております。

もちろん、50代からアルツハイマーを発病した人もいるし、脳血管障害の結果、介護の必要な人もいる。そういう多様性をとらえなければいけないのかな、と思いました。

「非生産的である」ことも、総務庁が出しております「高齢社会白書」に、「65歳から69歳の男性の53%が就労している」というデータが出ておりました。私は高齢者といわれる人たちの50%以上が職場で働いていることに驚きを感じました。

私の周りでも、若い人たちが社会に出て仕事に就く時代、孫の世話をしている高齢者はたくさんおられます。みんな若い人の見えないところで地域を支え、社会を担っているのです。そうなると、ここに無用論は成り立たないのかなと思います。

また、「病気持ち」ということにしても、確かに生活習慣病が加齢にともなって発生する率は高くなりますが、高血圧や糖尿病で、薬を常用しながらも日常生活に何の不便も感じていない人たちがたくさんいるとすると、生活自立度からみる健康を考えてもいいのかと思います。所得の面でも持ち家が多く、ローンを組んでいる人は少なく、経済的にもゆとりがあるという感覚が、高齢者の中に少しずつ増えてきているという現象もみられます。

また、子供の数が少なくなり、仕事のために子供たちが遠くに離れたりして、子供の世話になれないという状況が現実です。その中で、

「老いても子の世話にはならない」という気概をもつ高齢者が多くなりました。

あと、ジェンダー・フリーといいますか、社会規範の中で、男性と女性の役割が決められてきましたけれども、女性は家事からある程度解放され、育児からも卒業して、社会に自信を持って積極的に進出しています。

一方、男性はと言いますと、定年退職制度で、「元何々」、例えば「元大学教授」「元課長」ですね。「元」という字がついて、初めて本来の人間の姿に戻っているように思います。高齢の男性向きお料理教室がとても人気があって、お料理を楽しもうという男の人たちも増えました。ショッピング・センターで食材を探している男性も、微笑ましい情景として日常的になりました。

そういう男性の隠れた寛容な養育的な資質など、“ウーマン・リブ”“人権擁護”と、難しい言葉を使わなくても、男性と女性の自由な伸び伸びとした生き方が高齢者によって現実となって、次の世代に良い形で受け継がれていくのではないかと思っております。

そのように高齢社会をみると、「明るい見通しがたつのではないか」と考えました。

蓮　見　　森岡さんからのお話、“高齢者”というと老人という負の側面からみてしまうけれども、そういうメディアが生み出しがちなイメージからちょっと離れて素直に現実を観察してみると、高齢の方々にも多様性がある。今までと違ういろいろな見方が必要なのではないかというお話があったかと思います。

それでは引き続き、小関さんお願いします。

現実は深刻

小　関　　私が今日ここに呼ばれたのは「あまり綺麗事を言うな」という発言を期待されているのではないかと思いまして、そういう観点に立ってお話しいたします。私はむしろ今「老齢社会」とか「老人社会」というものを、あまりにも周りが簡単に考え過ぎているのではないかと思います。これからの日本の社会はそんな綺麗事じゃすまない。そうとう深刻な問題が山積していることが、現実問題としてあるのではないかと思います。

まず、「日本人が非常に高齢、寿命が長くなった」と言いますけれど、それは決して健康で長生きしているんじゃないんですね。大体、昭和の初期に比べて、現在は10万人あたりの老衰死が、1／5～1／7くらいに減っているわけなんです。ということは、非常に病気を持ちながら長生きしている。

それは、今日はいろいろなデータは省きますけれども、アメリカとか諸外国と比べてみると分かるのですけれど、それはまったく日本独特の国民皆保険による医療のパフォーマンス、つまり「医療の力でもって長生きしている」ということだと思います。

確かに、長生き、長生きと言いますけれど、人間の最大寿命は120歳だと言われています。120歳以上はどうしても生きられない。大体、今我々の年代は100歳近くまでいくだろうと 言われていますけれど、それも決して健康で、生き生きとしていける人は非常に少ないのです。

車、飛行機で言えば、金属疲労がだんだん激しくなって、結局は「相当の病気をもちながら治療（修理）して長生きしている」というのがこれからの現実ではないかと思います。

その証拠に、去年の人間ドックに入った35歳以上の人をみますと、8割5分の人が何らかの成人病・成人病予備軍・健康上の障害をもっている。「人間ドックをフリーパスした人は15％しかいない」という現実をみても、それがお分かりだと思うのです。

それから、現在、日本は世界の先進国の中で一番成人病が少ないのです。「心臓死は世界で一番少ない」と言われていますけれど、「2030年には世界で一番心臓死が多くなるだろう」と言われています。それが単なる推論ではなくて、現在の30歳代から40歳代の人達の健康状態をインプットすると、そういう結果が出てくるわけです。

平成9年における“がん”による死亡者は27万5,000人で、全死亡に占める割合は約30％で、死亡率第1位です。10大死因の大半が慢性成人病で、“がん”“心疾患”“脳血管疾患”で2／3以上を占めています。全死亡者の90％以上が50歳以上の方です。そして、大体成人病で亡くなる方の90％が50歳以上の人であるということを考えると、我々はもっともっと現実問題として我々の健康状態を直視してかからないといけないのではないでしょうか。

もちろん、私も先ほども申し上げましたように、年をとっても、どこまでも自分で楽しんで頑張っていきたいと思いますけれど、今日本の老齢化の中で高齢者世帯というのが、過去最高の560万を超して、介護を必要とする人が非常に多くなってきているわけですね。

もちろん、先ほど森岡さんがおっしゃったような、いろいろなとこ

ろで活躍なさっている方は以前に比べて多くなりましたけれども、その一方で、介護を必要としている人も非常に増えている。それに対して、「介護に必要な施設・人手の調達が追いつかない」というのが、現状ではないかと思うんです。

高齢社会の不安というと、ひとつは病気ですね。今、申し上げましたように、病気を持ちながら長生きしているということが多いですから。二つ目に心配なのが経済問題。国民年金をもらったところで、将来はその年金だけでは介護施設にも入れないだろうという状態ですね。三つ目は“生き甲斐”。今、森岡さんがおっしゃったように、果たして生き甲斐がある老齢老後の生活をできるかどうか。確かにごく少数の人はいろいろな意味で楽しんでいけますけれども、日本全体の社会をみると、楽しみながら老後を送ることは容易なことではないのです。

それから、四つ目は「誰が介護してくれるか」という問題です。後から具体的な問題が出てくると思いますけれども、現実問題として先ほどお話があったように、あまりにも老齢化の速度が速すぎるもので、それを受ける受け皿がまったく間に合わないというのが、現状であります。

とにかく、どうしていいのか分からないという状況です。これからあと10年経った後、果たしてご老人方が、どういう生活をしていけるのか。元気なうちはいいけれど、いったん病気になったり、寝たきりになったら日本の社会の邪魔者になってしまう。

敬老、敬老と申しますけれど、現実問題としてお年寄りをみるだけのパワーが若い人にはない。その証拠に、我々50歳以上の日本人が世

界で一番成人病が少ないわけです。ところが、今の35歳以下の若い日本人というのは、世界で一番成人病が多いのです。

だからこそ、その人たちが年をとったときの2030年には世界で一番心臓死が多くなるわけです。そして、ご承知のように日本の子供の体力が年々右下りに落ちてきています。それは体力だけではなくて、肉体的健康も、精神的健康も若人の体すべてがレベルダウンしてきているわけです。

そうすると一番問題なのは、「私たちが年をとった時に、若い人たちが我々を支えることができる体力と、経済力が日本社会にあるのか」ということが問題になってきます。そういう意味で、とにかく我々はもっともっと、これからの日本の老齢社会というものを現実問題としてしっかりととらえていかないと、とんでもないことになってしまいます。

蓮　見　　どうもありがとうございます。小関さんには医療の現場でいろいろ現実を直視してこられた立場から、なかなか深刻なといいますか、美化して語ることができない部分のお話をいただいたと思います。そういう意味では「森岡さんのご発言と表裏一体になった高齢問題を提起していただけたかな」と思っております。

2015年に65歳以上の老齢人口がピークになって、人口の25.8%が65歳以上の高齢者になる。その時ちょうど私が高齢真っ只中ですので、小関さんの頃まではまだいいかもしれませんが、「私たち団塊の世代の高齢化がこの社会を滅ぼすかもしれない」という不安も感じました。やはり高齢化は深刻な問題なんだということをご提起いただいたと思

います。

それでは、ルイス・ロバートさん、引き続きお願いします。

社会変化も含めた総合的考察が

ルイス　この問題に関してはどういう今後の傾向があるかという前提が必要だと思います。それを考えると、当然、今のような話で「健康状態がだんだん年をとると悪くなる」という現象があって、「今、日本ではさらに若い人たちの健康が非常に問題になっている」という話がありました。

それともう1つ、年をとったら問題になるのは、社会の動き、ペース、スピードが非常に速く、そして非常に複雑に感じることです。20年ぐらい前はコンピュータとかインターネットは、なくてもいいような時代だったのですが、もうそろそろインターネット経由で買い物その他ができる時代です。そのへんが1つの問題点になると思います。

アメリカの観点から考えると、たぶん、家族からの支援がこれからの日本ではだんだん少なくなると思います。アメリカではそういうことがありましたので、日本でもいずれそのようになると思います。昔のように、3世代が一緒に住むことが、難しくなる。各人の仕事の関係で一緒に住むことが困難になるだろうし、また子供の数も少なくなると思います。一方、国からのサポートも非常に難しくなると思います。若い人がだんだん減少したり、国自体の経済的な力もこれから不明な点がいくつか出てくると思います。それを総合的に考えると、経済的な立場はだんだん弱くなると思います。

それとインフレーションの問題もあります。銀行の利子もかなり少なくなってきています。貯金してきたお金がだんだんなくなってくる。日本では想像できないと思いますが、アメリカ人にとって老人社会とは、年配の方が食料が買えなくて、キャットフードを食べている、そういうイメージがあります。ちょっと想像したくないようなことですけれど、アメリカが経験していますので、やがて日本でも同様のことが起こり得ると思います。

それでもっと広く考えると、社会的な本当に大きい問題点がこれからいくつかあると思います。エネルギー関係では、例えば石油は2030年～2050年ぐらいまでしかもちません。食べ物の問題はもっと深刻で、ご存じかもしれませんが、海からとれる魚の量は計算上では限界があります。その限界は、1990年にぶつかりました。将来の問題ではなくて、8年前に実際に限界のところにきているのです。

だから無制限にエネルギー、食料などがあるという考え方が非常に間違っていると思います。当然「石油がなくなったら薬がつくれるか」という問題もありますし、ほかにもいろいろ問題が発生します。

これからは健康だけでなく、そのサポートのところにも問題が出てくると思います。将来は社会のかなり激しい変化が起き、インターネットも含めて、石油がなくなったり、人類が今まで経験したことのない、想像もしなかった変化が起こるので、総合的に考える必要性があると思います。

蓮見　ルイス・ロバートさんからは「これからの高齢社会というものを考えていきますと、かなり想像できないような、いろいろな現実的な問

題に人間社会はぶつかっていくだろう」というお話をいただきました。高齢問題は、「深刻な問題であることは否めない」という視点からのご発言だったかなと思います。それではおそどさんお願いいたします。

精神的な老人にならない生き方

おそど　私自身は“高齢社会”という言葉は好きではありません。それから“介護”という言葉も好きではありません。「人を守るなんてできない。介護という言葉を使うとしたら“介助”ではないかな」といつも思っています。そのエクササイズに「旅というのはとてもいい」と考えています。旅はリハビリであって、この頃は「旅はホスピスかもしれない」と思いはじめています。

先ほど申しました14回のツアーに参加している方の内訳をちょっと申し上げてみますと、糖尿病から全盲になった方、脳梗塞の麻痺が残っている方、それからクモ膜下出血で死にかかって生還された方などがおられます。

あるいはこの間のフィンランドのツアーでは、69歳のパーキンソン病のご主人の車椅子を５歳ぐらいお若い奥さんが押して参加されたり、それから、筋ジストロフィーというだんだん筋肉が衰えていく障害の方もおられました。

あるときはとても素敵な女性がツアーに参加されて、いつも帽子をかぶっていましたので、「素敵なカジュアルな帽子ですね」と申し上げました。パリのカフェでしたが、「おそどさんね、私この帽子をとるとね…」と言って帽子をとられると、髪の毛がありませんでした。

その方は癌だったのです。

それ以外にも小児麻痺の方とか、脳性麻痺の方とか、さまざまな障害の方がツアーに参加されています。ツアーに何度も参加して下さっている、リピートしている方が1／4いらっしゃいます。病気になるのは恐い。確かに恐いし、高齢になったら何か病気と付き合っていかなくてはいけないわけですけれども、「付き合いながらもより楽しく人生を謳歌していくのが、高齢社会ではないかな」と思います。

この間フィンランドに行きましたときに、ちょっと写真を持ってきたんですが、フィンランドとスウェーデンの近くのボスニア湾に氷が張っていました。そこを氷を砕いて進んでいく砕氷船に乗って、20名のツアーでしたけれども、全員に「アイススイミングをさせてほしい」とリクエストしました。アイススイミングというのは氷をわったところに、スイムスーツを着て、それでちょっと浮かんでみるのです。重装備していますので決して冷たくはないです。ツアーには車椅子の人、パーキンソン病の人、人工透析の人、全盲の方もいらっしゃいますから、添乗員は「止めたほうがいいんじゃないか」と申しましたけれども、私としては「希望があれば本人の判断を尊重してやっていいんじゃないか」と押し切りました。現地の砕氷船のスタッフも車椅子の人をサポートしてアイススイミングさせてくれましたし、決してあちらでは否定はしないのですね。

私がそういう旅をしながら感じたことがあります。年は関係ないと。このツアーに車椅子で参加した人の車椅子を押している年配の女性が

いました。「何歳ぐらいかな？」と思ったんですけれども、最後の日の、いつもツアーで開くさよならパーティーのときに、その女性の歳を初めて知りました。70歳でした。

去年のモンゴルのゴビ草原に行ったときには、82歳の夫の車椅子を70歳の奥さんが押していました。

それぞれ旅の途中で後ろ姿をみると70歳が30歳に見えたり、前を見てもとても若々しかったり、とても個人差があるものだと思うので、高齢者と一括りにはしたくないと思います。

それで、高齢者というのは、ある意味では人生経験を山ほど積んできた人たちなので、とても厳しい目、あるいは賢い肥えた目を持っています。やはり「自由で楽しい生活とまちをつくっていけば、その街を評価するし使いこなしていくと思うし、そうすれば人生楽しくなるので精神的な老人にはならないのではないか」と思っています。

蓮　見　　おそどさんからは、企画実行しておられるいろいろな旅行の話などから、「思わぬことができる可能性がある」という視点から、「少しまた元気なほうに戻ってきたな」というようなお話をいただきました。いちばん後になってしまって恐縮ですが、藤澤さんいかがでしょうか。

若者、教育、心の問題

藤　澤　　今日の座談会の趣旨が、もっぱら技術論的なところにあるとすれば、私の発言は必ずしも期待に沿えるものではないということを前提として、かねてから私が感じていること、あるいは考えていることを述べ

させていただきたいと思います。

最近こうした高齢化問題、あるいは少子高齢社会を迎えるにあたって、さまざまな論議がなされておりますが、論議の中で決定的に欠落しているものがあると私は感じております。それはこうした論議の場に、市役所などの審議会もそうでございますが、「いずれ当事者になるはずである若者」がまったく参加していないということ、これはおかしいのではないかという疑問をもっております。

先ほどから2015年、平成27年ごろには高齢化率が25%を超えるといわれておりますが、つくば市におきましては既に農村集落においては25%に近い高齢者のいる集落があるわけでございます。しかし、今の子供たちが成長して青年壮年になる頃には、彼らが高齢社会が抱えるあらゆる問題を、彼ら自身の問題として抱えることになるだろうと私は思っております。従いまして、今の若者たちは、将来どんな立場にあろうとも、この問題は避けて通れないことになるだろうと考えております。

私たちの世代が、このような結果をつくっているわけですから、当然の義務として将来の社会のあり方のの道筋をつけていく責任がわれわれにはあるのではなかろうかと思っているわけでございます。今ここにいる私たち自身も、10年あるいは20年という近い将来、文字通りの意味での高齢社会の構成者になっているわけで、私たちは、誰かに介護される、あるいは介助される、あるいは自治体なり国に面倒をみてもらう、あるいは地域社会の共同体の中で支えられている、という、そういう立場になっているにちがいありません。

そのことを考えますときに、そうしたときの「支え手」である若者

が、高齢社会について論議したり考えたりする場に今、参加していないということは、どう考えてもおかしいのではないかと思うわけです。幼児や児童に参加を求めるということは現実的ではないと思いますが、せめて青年たちには、あらゆる機会をとらえて、こうした論議の場に参加をしてもらう、というのが本当ではなかろうかと常々考えております。

今、お話ししたことに関連しますが、このことは一方においては、教育の問題ではないかと私は思っております。一昔前に比べますと、今の若者や子供たちの世界では、福祉、あるいはボランティアなどのほか「優しさ」「触れ合い」あるいは「思いやり」といった言葉が氾濫しているように思います。見方によっては言葉としては定着しているのかもしれません。

しかし、核家族化、歪んだ個人主義、物質的な豊かさのマイナス作用など、数え切れないほどの多種多様な要因によって、かなりの部分が若者たちの精神構造の中に、明らかに憂うべき病理というものが現われているのも現実ではないかと思っております。他人への無関心、人間への無関心とでもいうのでしょうか、若者たちを蝕みつつある病理は、今では“学級崩壊”というような言葉に象徴されますように、教育の現場にも及び始めていると考えております。

私はこの高齢化に向かうにあたって、もちろん制度、あるいは施設、整備された制度や施設は重要であろうと考えておりますが、同時に、「根幹の部分で最も大切なことは人間観ではないか」と考えております。結局は心の問題だろうと思います。どんなに立派なシステムや施設が整備されたとしましても、それを運用するのは人間であり、人間

の心だ、と考えるからです。

話は若干それますが、たとえば国際化時代を迎えるためには、国際語として有力な英語を身につけるということが必要ですし、情報化時代にはコンピュータやインターネットに習熟するということも必要だろうと思います。

しかし、英語を流暢に話す、あるいはよく理解する人が増えたらただちにそれが国際化につながるということではないと思いますし、また、コンピュータの達人が増えれば情報化社会が理想的なかたちになる、という保証があるわけでもないのであります。要は、英語もコンピュータもともに手段であって、目的ではないということではないかと私は考えております。どんな時代でも、社会を健全なものとして機能させていく、そのことができるのは、結局は人間の心の問題であるのではないかと考えているのです。

前段で申し上げましたように、「若者を高齢社会の問題を考える場に参加させるべきだ」ということは、実はそういう観点からも言えることではないかと考えています。「あなた方が社会を動かす時代は好むと好まないとにかかわらずそういう問題に直面するんですよ。だから一緒に考えませんか」という呼びかけを絶え間なく行い、早いうちから彼らをその場に同席させて、そして自覚を促すということを考えない限り、早いピッチで突入していく高齢社会への軟着陸は、うまくいかないのではないかという危惧の念を抱いております。

また、これも重要な意味をもつ教育のひとつであろうと考えておりますが、これほど多様化した情報化時代にあって、福祉や福祉社会の問題を学校教育の現場だけに求めるのは、いささか無理があるのでは

ないかと考えます。繰り返しになりますが、私は、ぜひ若者を論議の場に引きこんでいくことが、これからは大事なのではなかろうか、と考えております。

本題から脱線したかもしれませんが、私の考え方を問題提起のひとつとして述べさせていただきました。

蓮　見　ありがとうございました。藤澤さんからは、高齢化ということについて、何かと技術論でとらえがちになるんだけれども、そうではなくて「人の資質の問題ではないか」という問題提起をいただきました。「技術はあくまでも手段である。『高齢者をどうするか』と、狭い意味で高齢者だけをとらえるのではなくて、若い人にも呼びかけて、人間全体の問題としてとらえていくべきなのではないか」という問題提起があったかなと思います。

皆さんからそれぞれのお立場で「“高齢社会”をどうとらえるか」というお話がありましたけれども、今日、私は司会ではなくて座長ということですので、最後に、私も多少お話をさせていただかなければいけないようです。

産業技術から“人間スケール”での見直しを

高齢者という概念について、「“介護”ではなく“介助”」とか言われて頭の中が多少混乱しておりますけれども、まあ一般的に高齢層を介護が必要な人たちととらえますと、「非常に深刻な問題があるかな」とは、思います。

最初に森岡さんがおっしゃったプラトンの話に戻しますが、一般的に「人間」というと、私たちは何歳ぐらいの、どういう立場の人をイメージするだろうか、ということを考えてみたいと思います。私は、特に高度成長以降の日本の社会は、「人間イコール若い生き生きと活発な人」というイメージをもってきたのではないかと思うのです。彼らが消費を引っぱり、産業を活性化する原動力になってきたからです。

ただ、本来の「人間らしい人間はどういうイメージか」ととらえてみると、「必ずしも若い人に限定したような人間観にとらえるべきではない」と考えます。

さらに、「人間は何を求め、何を目的にして生きているのだろうか」と考えてみますと、これはやはり「死ぬまで自分らしく、そしてある種の充実感をもって、ギリギリまで生き通す」ことが非常に大事ではないかと思うのです。そのために「社会全体としてどうしていくべきなのか」を考える、そういう時代に立ち至っているのではないかと思います。

森岡さんが「常識的にとらえる」ということをおっしゃっていましたが、私たちの社会観は、高度成長の頃からいつの間にか産業技術を非常に重視する見方が強くなっていたのではないか。そういう視点で、高齢者の方を見ていきますと、「力がない、金がない、意欲がない、ついでにそれぞれが個性を発揮できない不自由さをもっている」ということで、逆説的に言うと「個性的な人たちなのだ」と思うのですね。

ところが、社会の１／４が高齢者となってきますと、必ずしも「産業技術でとらえきれないから、扱いにくい人たちだ」ということではすまなくなって、社会的なメジャー勢力になってくる。そうなると、

「高齢社会というのは、今まで50年間以上にわたって、日本の社会を動かす原動力になってきた産業技術というもののあり方を、人間社会が見直す契機にもなるのではないか」と思っているのです。
「どうも産業技術というのは、ひとりの人間のスケールからかけ離れ、巨大なスケールで人間社会を動かしてきたのではないか」と、思うのです。

例えば、私は自動車づくりにたずさわってまいりましたけれど、モータリゼーションは、ものすごく巨大なインフラです。つくばに来てつくづく思うのは、自動車がないとどこにも行けない。いつの間にかそういう大きなインフラ社会ができあがってしまった。スーパーマーケットを見ますと、特に閉店直前に行っても、ものすごくいっぱい物がある。「これはどうなるのだろうか。明日はゴミになってしまうのだろうか」と思うと、ある種の恐怖を感じたりするわけです。

ところが、40年ぐらい前の社会の仕掛けというのはどうかと思い出してみますと、お魚屋さんが御用聞きに来て、「今日はいい鰤が入りました」と言うと、その日の夕食が鰤の塩焼きになったりする。御用聞きというのは、ある意味ではその家の献立まで決めてくれる情報サービスだった。それがひとりの人間のスケールで非常にバランスよく機能していた時代だった。つまり非常にエコロジカルな社会だったのではないかと思うのです。

ところが、テレビのコマーシャルでは、たとえば風邪で熱があるご主人に、奥さんが風邪薬をあげると「あっ、直った」と言って、喜んで新幹線で出張に出ていく。「3日間じっくり寝ていたら直るものを、高価な薬で無理やり直してまでも働かなくてはいけない」というよう

に、無駄が多くなってしまった。

そういう現実を高齢化を通してもう一回、人間スケール、テクノロジーで見直すことによって、何か新しい、エコロジカルな、つまり「持続可能な社会づくり」を考えはじめるきっかけになるのではないかなと思います。

今までと違う新しい効率化の概念というものが必要となってくると思うんですけれど、高齢社会についても「いつまでも元気に自立的に生きていくためには、どうしたらいいだろうか」というところに焦点をあてて、知恵をしぼっていく必要があるのではないかと思います。

私は、とりあえず「深刻な介護の部分を私の考える範疇からはずして高齢社会のあり方をとらえていきたい」と思っている立場でございます。

まず、動けない人から

小　関　　今、お話を聞きますと、やはり綺麗事すぎると思うんですね。皆さん方はやはり現実問題として「今、寝たきり老人が日本で100万人以上いて、虚弱老人が約130万人いて、要介護の痴呆老人が30万人以上いる」ということをお忘れになっているのではないですか。

もちろん、今、私たちは医療の現場にいますが、森岡さんがおっしゃったり、おそどさんがおっしゃったことも全然考えていないわけではないです。それは考えとして持っているのですけれど、現実はそんなものではない。家庭で暮らしているご老人、施設にいらっしゃるご老人の多数は、そのような綺麗事には程遠い生活を強いられているの

です。

例えば、今つくばに寝たきり老人台帳を持っている方が約460人、一人暮らしの老人が大体730人いらっしゃる。そして、特養老人ホームに入っていらっしゃるうちの71%が痴呆の老人の方で、しかも30%が1人で留守番ができません。「道に迷う、買い物ができない、金銭管理ができない」という方がいらっしゃる。

さっきから議論が咬み合わないことを感じていたんですけれど、まず言葉の問題です。“老人社会”とか“介護”とかいう言葉が好きでないとおっしゃるけれど、実際問題として日本は、すでに老人社会になっているのであるし、“介護”でも“介助”でも、これは言葉の遊びであり、問題ではないと思うのです。

問題はその御老人に接する人の心だと思うのです。

ただ、いかにしてご老人が「助けられた」「護られた」という、引け目を感じないような気持ちをもって我々が介助していく、介護していくことが必要だと思います。

現実問題として、先ほど言いましたように、日本の現実を考えますと、120万人くらいの寝たきり老人、それから30万人から50万人の痴呆老人が、1人では何もやっていけないわけです。それを助ける人はいないわけです。

私もフィンランドに行ったことがあり、フィンランドで、あのようなことをできた人は、おそどさんの功績だと思うのです。けれども、行かれた人は非常に幸福なんですね。

しかし、現実問題として、この辺にいらっしゃる老健施設とか老人ホームにいらしている方々は1人で出かけると、どこへ行ってしまう

か分からないから、50人ぐらいずつまとめて、その辺の買い物に出たり、場合によっては20〜30人ずつまとめてデパートに行ったりすることが最高の喜びになるわけです。そういう非常にレベルの低い問題ですが、これからますますそういう老人が増えてくるわけです。心のケアとしてはそれくらいしかできない。それから後は、老健施設の中のピアノを弾きながら皆で「兎追いし」とか昔の音楽を歌ったりして、それだけで生き生きしてくる。

もちろん、「フィンランドに行ける」「車椅子を押せる」、そうできたら最高ですよ。しかし、現実問題はそういうことができない人が日本には五万といる。そして、そういう人がこれからますます多くなってくる。それをどうするかについて我々が考えなければいけない。老人問題を考えるときにそこを考えないで、単なる綺麗事ばかりでは、解決にはならないと思うのです。

私はいつもそういうことを感じてますが、今日は特に感じます。

蓮　見　小関さん、高齢者というと、すぐ寝たきり老人を連想してしまう方が多いんじゃないかと思ったものですから。

小　関　いやいやそうは申していませんでしょう。それは時間がないから１つ１つ言えないのですけれども、さっきも言ったように、「老齢社会、イコール寝たきり老人の多い社会」とは思っていないですよ。

もちろん先ほどおそどさんがおっしゃったように、老人ほど個人差のある年代はないわけです。若い人は個人差がほとんどない。だから、同じ65歳でも50歳ぐらいのアクティビティ、活動力を持っている人も

いるし、そうかと思うと65歳でももう全然動けない人もいらっしゃる。だからそれはその人その人で違うわけです。

ただ、最低レベルの線をおさえてあげないで、動ける人だけを我々が相手にしたのでは、動けない人はじっと家庭の中で、または施設の中で自分の寿命がつきるのを待っている状態になってしまうということを言いたいのです。

私たちがまず考えることは、最低レベルのところをみんなで考えてあげて、そして、おそどさんの旅行なんかに行ける人は、ぜひみんなでバックアップしてあげるし、いろんなことを考えることをできる人はやってあげる。それで今、座長さんのおっしゃるように、高齢――高齢化という言葉が嫌でも高齢化には違いない――の方々のいろんな層を見なければなりません。そうじゃないと楽しめる、遊べる人、働ける人だけを擁護して、後は全部捨てちゃうことになってしまうと思うのです。

蓮　見　　小関さんのお考えになる最低レベルのところにこの論議を集中していった方がいいですか？

小　関　　いや、そんなつもりはありません。ただ今日の題目が『つくばセンター地区における高齢社会に向けた環境の形成について』ですから、「高齢社会では、いろいろな活動力のある人、いろいろな状態の人がいることを抜きにして、良いことだけを考えたのでは意味がないでしょう」ということを申し上げているわけです。

蓮　見　　私事で大変恐縮なんですけれども、私の父は脳出血で１年半植物人間状態になって、ずっと介護して看てきた経験があります。それから私の母は今、老健施設に入っていて、私なりに息子としてはいろいろとケアをお手伝いしている。

いろいろな立場があるけれども、今日、私のここにいる立場として、「高齢化を、社会全体レベルでとらえたい」という立場でお話ししたつもりなんです。

確かに個々の問題というのは、それぞれにいろいろと深刻ではあるけれども、誰でもが論議に参加できる社会全体としてとらえたいんですね。例えば、藤澤さんがおっしゃったように、「若い人の意識づくりも含めて、社会全体をどうまとめ整えていくべきかという視点が必要だ」と思います。異なった立場・経歴の６人が集まっていますので、それぞれ個々違った視点で今日はお話ししながら、後々オーバーラップする部分についてさらに深く論議していくという事でよろしいでしょうか。

Ⅱ．つくばセンター地区に期待される役割

それでは、第１ラウンドですけれども、いろいろそれぞれの立場から高齢社会のイメージといいますか、高齢社会の意味、概念といったものについてお話しいただいたわけです。しかし、それぞれ「一言では括りきれない、非常に複雑な内容を含んだ問題なのかな」と感じられたと思います。そういう意味では、この短い時間の中で急いで１つのところに絞りこんでいかないで、それぞれが個々にお持ちの高齢ということに対する問題意識、イメージ、そういったものをベースにして次の段階の話に移っていきたいと思います。

時間もないので大変恐縮ですけれども、先ほどの高齢社会の論議を受け、つくばセンター地域に目を移して、このつくばセンター地域のあるべき姿、もう少し広げて県南地域、あるいは県レベルでもいいと思いますが、「つくばセンター地区が果たすべき役割」あるいは「高齢社会をとらえて、どのようにつくばセンター地区が変わっていったらいいのだろうか」ということについて、お考えを述べていただきたいと思います。

まず、つくばセンター地域の概念について、ちょっと勉強しておきたいと思うんです。おそどさんはちょっとお分かりにならないかも知れないんですけれども、つくばセンター地域というのは、今、私たちがいるつくば第１ホテルを中心としてほとんど歩いていける範囲ですね。北はエクスポセンターから、松見公園、メディカルセンターあたりまで。南が研究交流センターあたりまでを“つくばセンター地域”

ととらえます。ということで、もう少し広げてお考えになるのも結構ですが、それぞれのお考えをお聞かせいただければと思います。

それでは一巡したところで、森岡さん、いろいろとお感じになったこともあると思いますけれども、その辺も含めて、やはり今回も５～６分でお話をまとめていただけたらと思います。

高齢者の人影が薄い街。企業の地域貢献の見直しも必要

森　岡　　私の視点は「この地域で生活している高齢者に、どういうふうにサポートしていけるのか」また、センター地域を中心に、「この時代を一緒に生きている世代として“共に生きているよ”という気持ちをどう伝えていけるのかな」というところから考えたいと思っております。そこで年をとっても活力をもって、生き生きと、なんとか社会とつながりながら生きて行こうとしている高齢者を中心に考えました。

つくば市のセンター地区というのは、さまざまな利用施設がすでに準備されております。自然発生的な地方都市の実情から考えると、これほど贅沢なところはないと思います。地図も塗り変えられるほど急激な変化の中でこういう都市がつくられたわけですが、今、センター地区を見ていて、ご高齢の方がどれだけ施設を活用し、その機能を享受しておられるのか、といえば、私はまだまだという気持ちを持っております。

そういう意味で、この地域で長年住んでこられた高齢者たちが、「今、自分たちが守ってきた土地がどういうふうに変わってきたのか」「どういうまちになったのか」を、もっともっと体験し、自分が歩んできた人生に“満足度”“充実度”を呼びおこしていただきたいと願っております。

経団連は1990年代に入り、人間を対象にした企業貢献を模索してまいりました。「大企業の集まりである経団連ですら企業姿勢として、市民性、地域性を重視する方向に転換してきたのではないか」と感じております。

「ノン・キャッシュ・貢献」と言いますか、「人材、技術、それから商品の提供などを中心に、地域と密着型の企業となりたい」という願いが見えるわけです。

とすると、センター地区にさまざまな形で参画している人たちも、そういう理念で、「地域への貢献」を考え直していただきたいと思います。

また、高齢者を中心に労働についての価値観も変わってきました。収入を目的とした労働というものももちろん大切ですが、枠を広げて、健康の維持、生きがい、仲間づくり、あるいは社会から取り残されないために社会参加のきっかけ、仲間づくりという大きな見地から労働というものは考えられるようです。

とすれば、なんとか自分たちが生きがいを持って、この地域の動きに絡み合いながら生きていきたいと思っておられる高齢者を、雇用のかたちでもっと工夫していただけるのではないかと思っております。賃金とか時間、あるいは作業の内容とか、いろいろ組み合わせて、セ

ンター地区で社会の一端を担っている高齢者の姿が見えてくることを願います。

学生は学校を基盤として、友人という密度の濃いネットワークを持っております。働きざかりの人たちは、職場や家庭に帰属しております。高齢者は子供たちが自立して家族の関係が変わり、定年退職で職場からも切り離された時、孤立したり、無力感をもったりするものです。ただひとつ残された地域の縁をもっと強く結びつかせることによって、高齢者の潜在的な活力を引き出していくことがこれからの課題だと思っております。

蓮　見　　はい、どうもありがとうございました。おそらく、私の見るところ、センターも含めてですけれど、「つくばというのは非常に人影が薄いまちかな」と思います。特におそどさんは、そんな印象を強く持たれるのではないかと思います。

やはり、もっと人の姿が見える、人影が濃いまちにしていかなくてはいけない。その中での高齢者の姿が、散歩しているとかではなく、雇用されている、あるいは働いている、という活動的な姿が現れてくる、そういう仕掛けを何かつくっていけたらいいのではないかという問題提起だったと理解しております。

それでは、小関さんどうぞよろしく。

気軽に行ける“遊び場”の設定

小　関　　私はですね、やはりフィンランドのヘルシンキ市に行きまして、驚

いたのは駅の前にこの第一ホテルより大きい、50歳以上の方々が楽しむための施設がありました。50歳以上になるとパスをもらえるのです。それを持っている人はそこを無料で利用できる。音楽を演奏したり、本を読んだり、絵を描いたり、彫刻をしたり、エアロビクスをしたり、ビリヤードをやっている人もいる。また、ダンスホールや、いろいろなものがあるのです。そして、50歳以上の人だけがそこに来てお互い楽しんでいるわけです。

私は5年前に見たのですけれども、正直あんまり感激しなかったのです。それは「ご老人だけだと寂しいのではないか」と感じたのですけれども、私が老健施設をつくり経験したことですが、ご老人方が老健施設に入りますと、それまで生きようする覇気のなかったような方が生き生きとして、車椅子でこられた方が精神的、肉体的にも生き生きとしっかりされて、歩いて退所されるまでになる。

その様子を見まして、もちろん幼稚園の人たちが「ちいちいぱっぱ」と歌ったりして慰めるのもいいのですけれども、やはり人間として社会人として普通の生活がしたいと思っていらっしゃるのだなと実感させられました。しかし、音楽会とか映画館とか展覧会とかにはなかなか行くことができない。確かにそういうところに連れていってくれるボランティアの人がいればいいのですけれども、なかなか現実問題としては難しい。

そうすると、「何歳以上の人は気がねなく楽しめる」という、何と

言えばいいのでしょうか、総合遊び場が欲しいのです。ヘルシンキの場合には、私どもの病院の２倍くらいあるビルディングでしたけれども、そこ全部がご老人のための“遊び場”になっているのです。今回の企画をしてくださったつくば都市交通センターの方にはそういうものを、ぜひつくっていただきたいと思うわけです。

ただ、それはあくまでもあのセンター地域でいいのかどうか、ちょっと疑問だと思うのです。先ほど座長さんがおっしゃったように、今、このつくばは車がないと動けませが、結構、車で自分で動ける人もいらっしゃるわけです。ただ、これだけ混んでくると、そういう人が果たしてこのセンター地区まで来るのがいいかどうか、という問題もあります。

私としては、できたらもうちょっと静かなほうに、それをつくっていただけたらいいんじゃないかと思います。結局、気軽にひょいと自分で遊びに行けるところがないのです。特別なところに行って楽しめるという人というのは本当に幸福な人なのです。そうじゃなくて普通の人が気軽に遊べるところが欲しい。それがひとつ。

次に、「高齢社会」「高齢社会」と言いますけれども、先ほど市長がおっしゃったように、急がば回れで、今の若い人たちをもうちょっと頑張らせないと2015年になると――我々がそこまで長生きするとして――、その時の中年の人たちは我々の面倒をみることができなくなるのです。なぜかというと今の85／1000という保険料率で は、結局若い人たちが、中年、高年になったときに、自分たちを治療するだけで使い果たし、我々年寄りまで保険を利用させてくれることができなくなります。それが日本の現状だと思うんです。

そういう意味で、もちろん精神的、肉体的にも、若い人たちが気楽に遊べ、運動できる、「ドゥ・スポーツ・プラザ」などという大それた物ではなくていいから、体育館を２、３面つくったり、バトミントン場をつくったりして、つくば市の、何もつくば市と排他的にならなくてもいいんですけれども、つくば市の若い人たちはそこに行って遊べるような場所が欲しい。

それからもうひとつは、先ほども森岡さんがおっしゃったように、働ける人は働いたほうがいいと思います。私はフィンランドでそれを言いましたら、ヘルシンキ市の女性の福祉部長さんが「何で今から働かなくちゃいけないの？」と言うのです。

私はこれまで「相当高齢になって動けなくなるまで働くべきだ。もし自分にお金がたくさんあっても、自分が働いてその代償にお金を貰うというのは生きがいになっていい」というのが持論だったんです。けれども、それを話したら、「なぜ今まで働いていたのに50歳になって働く必要があるのか？　50歳からは我々は遊ぶ時期なんだ」と反論します。いまだに完全に釈然としないんですけれども、今、日本の国情を考えると、先ほどからおっしゃっているように、働くことのできる老人は労働力としても、これからは必要になるかも知れない。

そういう意味でそれを気楽にできる就職センターじゃないですけど、そのような場所がほしい。老人の働きと、楽しみと、そして忘れてはいけないのが若い人のスポーツプラザでしょう。と同時に意外に驚くほど若い人の心が病んでいますから、カウンセリングセンターという大それた物でなくてもいいから、お兄さん、お姉さん、ないしはおじさん、おばさんと話のできるような若い人のセンターが、ぜひ欲

しい。たとえ急がば回れでもそれが１番近道のような気がいたします。

蓮　見　　いろいろな世代の人が交流できる場所、高齢者の人が気軽に遊べる、それから若い人も気軽にドゥ･スポーツという形で遊べる、そういうような場所。また、働きたい人が 働けるような場所。いろいろなものをセンターに、センターがいいかどうかという問題もありましたけれども、「どこかに積極的につくっていくのがいいのではないか」というご意見でした。

小　関　　違います。それぞれ別々にです。年取った人は年取った人だけが気軽に遊べる場所。若い人は若い人で運動ができる場所。全然別です。

結局、お年寄りは、同年代の人と交わることを欲していますから。もちろん年代を越えて交流できる人はやればいいんです。とりあえず「引っ込み思案なお年寄りには、同年代の人と気軽に遊べる場所が欲しい」ということです。その上で老若男女が交わえるところがあればよいだろうと思います。

蓮　見　「気軽に」というところにポイントがあるんですね。分かりました。では、ロバートさん、どうぞ。

新しいものの見方と発想で全体的見直し

ルイス　　第１ラウンドでは「かなり深刻な状態になるのではないか」というまとめがありましたが、それは確かにそうだと思います。だからダメ

ということはないと思います。「そうなる可能性が非常に高いのでどうしたらいいか」ということだと思います。

私は32歳ぐらいまでアメリカにいたので、日本とアメリカを比較できる立場になっていると思います。そこで非常に感じるのは、障害のある人、年配の人を、今の日本の社会は見たくないような雰囲気になっているのではないかというのではないかという気がします。

アメリカでは、車椅子に乗っている人たちとか、障害のある人たちは、普通の社会の中に融けこんで生きている感じがあります。彼らをとくに違った人とは、まったく考えていません。ごく普通の人と感じています。日本ではその人たちが来たら、知らん顔をするような雰囲気がなんとなく強くて、その辺の全体的な社会を見直す必要があります。日本人も比較的感じているのかもしれませんが、アメリカ人の私としては、ここにきて非常に強く感じています。

それで、新しい見方に関して、第２ラウンドでは「どういうことをすればいいのか」という概要についての話がありましたが、第３ラウンドでは具体的なことについて話したいと思うのです。

ひとつは医療関係で、私は専門家ではないのですが、「自分が病気になったら患者さんに対する見方が変わる」と感じています。例えば歯の治療をするときには、日本では大体４回ぐらいは医者に行きます。アメリカでは１回で終わります。１回で済むことがなぜ４回もかかるのかというと、「毎回保険でいろいろ請求している」と説明がありまして、「ああ、なるほどね」と思いました。

また、アメリカでは、風邪になったら病院からピタリと直る抗生物質をもらいますが、ここでは５種類ぐらいの薬がでます。「それはど

うしてか？」と聞いたら、自分のところで薬を（自院薬局）持っているので、そこで儲かっているという話でした。私は１度、５種類の薬を同時に飲んだのですけれど、仕事にならなくなりました（笑）。これでは病院に行くより、自然に直した方がいいと思います。

私の父は心臓のバイパス手術を受けました。アメリカでは、手術後できるだけ早く患者を普通の生活に戻すようにします。また、腰の関節の手術も受けたのですが、術後最初の日に「歩けますから」と医者から言われました。父が驚いて「歩けないでしょう」と答えましたが、次の日には本当に歩きました（笑）。日本では全然考えられないようなことです。

ひとつの理由として、アメリカではコスト（医療費）が非常に高いので、早く退院します。それから「できるだけ普通の生活に早く戻すということが１番重要だ」という考えがあります。アメリカ人の私から見ると、日本には無駄なところがいろいろあると感じています。これからは当然病気になる機会が増えると思いますので、いろいろ新しい見方が必要だろうと思います。

ボランティア活動は日本では神戸の地震の時から「日本でもボランティア活動をする人が増加した」とニュースで話題となりましたが、しかし心から「どうしても人を助けたい」ということではなくて、「みんなもやっているから自分もやる」という気がします。もう少し心からのボランティア活動が増えたら非常にいいなと思います。

先ほど言いましたように、経済的な問題、政府がどこまで面倒を見ることができるか、まだ十分ではないので、いろいろ新しい活動が必要だと思います。

いくつか考えなければならないことがあると思います。もっとユーザーフレンドリーなデザインが必要だと思います。いろいろインターフェースの問題もあります。例えば駅に新しいタッチパネルで切符を買う設備ができましたが、年配の人たちは困っているような感じがします。何を押せばいいか、よく分からず、もっと経験のない人たちでも簡単に使えるインターフェースが必要でしょう。

これに関して、私のつくば研究コンソーシアムではアドヴァンストスキムリサーチという研究プロジェクトがありまして、皮膚に関する研究を行っていますが、思うほどの成果は得られませんでした。

また、交通関係の問題もあります。数kmぐらい離れている所に住んでいる人たちがセンターまで行けるかどうかといえば、行けないでしょう。その辺の交通システムの見直しも必要でしょう。

エンターテイメントは日本では非常に問題になっていると思います。私の父は今、79歳です。毎日、月曜日から金曜日まではゴルフをやっています。土曜日曜は休みです。つまり１か月の22回ぐらいはゴルフをやっています。父は４人組の中では１番若く、他の人は80歳以上。それで１ヵ月のゴルフ代はだいたい3000円。なぜこんなに安いかというと、彼はサンディエゴ市にずっと住んでいますし、55歳以上の年金をもらっているので安くゴルフができるんです。

またＡＡＲＰという定年退職した人たちのためのグループがあります。割引サービスもあります。大学に行けば年輩の方が大勢勉強して

います。日本の大学では少ないですね。そういうところの見直しがこれから必要だと思います。そうすると、人は活発な生活ができるし、最後の最後のところまで元気でいることができると思います。

そういうような、全体的に見直しと総合的な戦略計画が必要だと思います。

蓮　見　「アメリカではより多くの人が普通の生活空間を共有している」というお話から始まりまして、基本的には「何か問題があればできるだけ早く普通の生活に戻る、あるいは戻す知恵と言いましょうか、そういうノウハウが必要だ」というような問題提起ですね。

それから、ボランティア活動をもっと自然にできるような社会環境づくり。あと、ハードウェアとしての、いろいろなインターフェイスなどのユーザーフレンドリーな使いやすいシステムは、もっと工夫のしようがあるだろうということでした。また、エンターテイメントの問題ですね。これは小関さんがおっしゃっていたところと共通すると思うんですけれども、私自身も、日本というのはエンターテイメントの部分が非常に“下手である”という気がするんですね。

ルイス　お金がかかりますね。

小　関　高すぎるんですよ。

蓮　見　高いですね。しかし安いエンターテイメントが、地方自治体やいろいろなところで工夫されはじめています。「これから」ということも

含めて、非常に多様な問題提起をいただいたと思っております。

では、おそどさん。センター地区はなかなかイメージできないかもしれませんけれども、一般的なお話でも結構ですので、ぜひいろいろなヒントをいただけたらと思います

楽しいまち歩きのためのハードとソフト

おそど　はい、私は30歳代後半まで旅のガイドブックを書いてきておりますので、地図を見て、そのまちを歩いたり、「ポイントをどうやってしぼるか」とか、そんなのでちょっとお話しさせていただきたいのです。

１回目につくばにまいりましたときに「とてもきれいなまちだな」と感じました。道はまっすぐで、すっきりしているまちでした。で、オーストラリアのキャンベラに似ていると思いました。それで、「やはり人工的なまちだな」と思ったのです。それは良くも悪くも、先ほどもお話されていました「人の影があまり見えなかった」ということでしょう。車はたくさん走っているのですけれども、「話しながら歩いている人の影とか、あまり見えなかったな」というのが印象です。

それから、地図を送っていただいてざっと見ましたけれども、「とても真面目な地図が発行されているようだな」と思いました。それで、どういうふうにして行ったらいいのかなと思ったときに、ハード面とソフト面というのがあると思うのです。

まず、ハード面のほうからお話をすると、「まちの中心に車で来て、車で帰る」という構図をやはり変えていかないと、「まちの中心が、ただ単にポイントであって、また去って行く、という動きしかする必

要がない」と思います。

それで、これはひとつの提案ですが、イギリスの220都市以上の町でショップ・モビリティというのがあります。日本ではタウン・モビリティと言っていると思いますけれども、電動車椅子や電動三輪を借りて体の不自由な人が自分の力で、誰の力も借りずに「ごめんなさい」「ありがとう」「すいません」と言わずに、ショッピングやまち歩きを楽しめるというものです。そういうものをやってみたらよいのではないかというのがひとつ。

それから、車椅子というのは、簡単に操作できるものではありません。元気な私が手動の車椅子を操作するのでも、やはり少し練習は必要です。電動車椅子もスピードが出過ぎますし、曲がり方やラフロードは、なかなか難しいわけです。

イギリスには車椅子の教習所というのがあります。自動車の教習所と同じように、室内でビデオテープなどを見て、それから路上へ出ます。コースができあがっておりまして、そこをインストラクターの指導のもとに練習するわけです。例えば役所の庭にそういったものがあって、障害をもった人で既に車椅子を使っている人と、これから障害をもつであろう高齢者が出会い、車椅子の走らせ方を練習する教習所があってもいいのではないでしょうか。ですから「教える立場と教えられる立場、どちらも市民で運営されている教習所が毎日曜日開かれる」というのはいいかなと思っています。

それから、イギリスでは4,250以上の車椅子のトイレが１冊の本でリストアップされています。それを１冊持っていると、全英国中の車椅子トイレが、「何時まで開いているか」、「どこの公園の入り口からど

うやって入ったらいいか」、「男性用、女性用、それから男女一緒で使えるトイレ」とか、そうした情報が分かるのです。

また、ひとつの鍵で4,250以上の車椅子トイレが開くシステムにもなっています。鍵があるのがよいかどうか分かりませんけれども、車椅子の方、あるいは体の不自由な方、排泄に問題をもっている方がまち歩きしにくいのは、やはり「トイレがどこにあるのか」とか「車椅子で入れるのか」とか、そういった心配事があって出られない方も多いかと思います。

それから、無料のシャトルバスというのがつくばにはあるのでしょうか。センターを循環するバスで、例えばリフト付きのバスがあったら、もっと車椅子の方とかお年寄りの方が使えるのではないか。それから車椅子対応のタクシー。ロンドンのタクシーのかなりのパーセンテージを占めるタクシーは、後ろのトランクに簡易スロープを積んでいます。ですから車椅子の人が来たらすぐ簡易スロープを出して乗せてくれるようになっているんですね。そういったハード面を着実に実行していくというのがひとつ。

それから、ソフト面のほうですけれども、先ほど申しました、「学園都市であるがゆえに真面目さを大事にしていかなければいけない」というのはよく分かるのです。けれども、やはり人間が生きていくわけですから、本音の部分で、もっと楽しいまちにする。それは、人間臭さとか、どれくらい崩せるかということだろうと思うのですが。

例えば少し飛躍しすぎかもしれませんが、新橋に行きますと、昔、若かったママさんが、70歳近くになって、ババさんになってバーをやっているお店があるのです。ですから、ママがいるバーじゃなくて、

ババがいるバーがあってもいい。例えば市が委託して高齢者バーがあってもいいのではないか。スポーツセンターとか、そういう括りではなくて、高齢者抜きということではなくて、もっとユニークさを追求してもいいのではないか。

それから、ツアーを企画する時に朝市があるところは活気があるから好きなのですけれども、高山は朝市はほとんどおばあさんたちがやっている。ですから、手作りのものをおばあさんたちおじいさんたちが持ち寄って売れるような朝市が、例えばセンターに毎週立つとかすればいいと思います。その人たちに例えばこういうことができるかどうか分かりませんが、市からなにがしかのお小遣いを渡すとか。そうすると、「ああ、今日は元気だったね」という点呼にもなる。

そういう自由な発想では、できないのかもしれませんけれども、そんなことを感じました。

それからどこまでも階段なしで行ける遊歩道。土。つくばの遊歩道はあくまでも土にこだわって、例えば野生の花、たんぽぽ、すみれ、つくし、そういったものがちょっとあるといいかと思いました。

蓮　見　　ありがとうございました。

おそどさんからは外国で実際に多様に行われているいろいろな活動についてご紹介をいただきました。この中にはつくばでも積極的に学び、取り入れていくべきものもあったように思います。

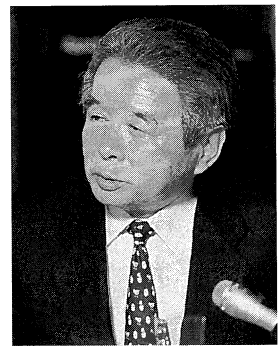
それでは、藤澤さん、お願いいたします。

出会い・触れ合い・生きがいのあるセンターに

藤　澤　　センター地区のことですが、その前にですね、先ほど小関先生のほうから「一人暮らしの方、痴呆性の方、それから施設に入所されている方、寝たきりの方、そういう方々をどうしていくのか」というお話がございました。これらの方々は介護保険でこれから対処していくだろうと思いますけれど、「介護保険の枠の中に入らなかった人たちをどうするのか」が大きな課題になってくるのではなかろうかと思っております。

私ども農村社会に住んでいる人間の最も誇れるものと申しますのは、隣人愛で支え合う共同体でございます。お隣の喜びは自分の喜び、お隣の困りごとは自分の困りごと、そういうことで、癒し合うというか、癒し合えるというか、そういう社会をつくってきたわけでございます。けれども、都市化されることによって、そういうものが薄れつつあるということも事実でございます。従いまして、そうした農村のいい意味での伝統文化を私たちはいまいちど思い起こしてみたい。そこで、新しい時代にふさわしい、癒し合える社会とでもいうべきものをつくっていくべきではなかろうかな、と思っております。

また、高齢者は生きがいを求め始めているというか、求めていると私どもは思っております。つくば市にはシルバー人材センターがございますが、現在、会員数360名、この方々の年間の就業のべ人員と申しますのが22万7000人くらいになっています。この方々の稼ぎ出す金額が、１億4000万くらいになっているのです。



それから同時にスポーツ、ニュー・スポーツといわれるようなスポーツに生きがいを求めたり、健康づくりに生きがいを求めたり、あるいは趣味の仲間をつくって、そこに生きがいを求める。そういう健康な方々が１万7000人近くいるわけですから、そういう方々をどうサポートしていくのかというシステムを構築していくことも大事なことなのではなかろうかと私は思ってます。

そこで、このセンター地区の問題がございますけれど、私がいまさら申し上げるまでもなく、私どもは機械を使うことによって、合理的で、その中から自由で、そして豊かさというものを享受してきました。しかし、同時に一方においては、人間としての大事な側面を忘れていたことに人びとは気づき始めているのではないかと私は思っております。

従いまして、今は精神的なもの、あるいは先ほどお話がありました文化的なもの、豊かさ、あるいは生活の質的な面や多様性を求め始めているのではないか。あるいは、職場におけるいい人間関係の回復を求め始めているのではなかろうかと思うわけであります。

私はセンター地区にはぜひつくばでも、ヨーロッパに見られるような広い空間というか、シンボルになるようなものをつくっていただきたいと思います。そこにはさまざまな市や縁日、昔、私どもは縁日と言いましたが、そういうものが生まれて、物を売ったり買ったりするだけではなく、多くの人と出会い、あるいは人と人との触れ合いがそ

こで生まれたりするのです。そういう都市機能というものを整備していくべきだろうと思っております。

都市は人間の心をつくり、都市には人格形成をしていく役割りもあるということを忘れてはならないでしょう。従って、車は下にあり、そして人の歩行はペデストリアンの2階という構造になっています。ですから、このセンター広場をさらに広げていく大きな空間をぜひつくっていただきたい。そこが人間中心のまちになるような、電車から降りてそこに出たら、ああ、つくばに帰って来たんだと思える、センター地区の整備をしていただきたいとそう思っています。

蓮　見　今までのまちづくりが、ハードウェア重視、あるいは機械に頼る方向だったのに対して、やはり「もう一度人間の側面から見たまちのあり方を考えていく必要がある」というお話だったと思います。

さて次に、今日どれだけ具体的なお話になるか分からないのですが、これからの第3ラウンドで具体的施策のあり方について話を進めていきたいと思います。もう既に何人かの方からは具体的施策も含めたご提案があったわけですが、最後の1ラウンドを効率的に行うために、私から問題提起としての話をさせていただきたいと思います。

“見せる”より、“使う”施設を

最近バリアフリーとか、ノーマナイゼーションとか、ユニバーサルデザインという言葉がよく聞かれるようになりました。これはみんな輸入された言葉ですけれども、30年くらい前につくば市ができたとき

には、おそらくこのような概念が、ほとんどなかったのではないかなと思うのです。

私が８年前につくばに来て、最初に感じたことのひとつに、ちょっとした段差とか、いろいろとちぐはぐな部分が多いなということがあります。おそどさんがおっしゃっていた“人工的なまち”という言葉、これはつくばに対してよく使われる言葉ですけれども、そういった部分を私も感じていたんですね。

今までの価値観として、何か建物を建てたり、施設をつくったりするときには、どう見せるかということを意識してしまう。みんなに「わー、スゴイ！」と言ってもらうように、“どう立派に見せるか”を考えていくのが、ものづくりの常道だった気がするのです。

私はＧマークの審査員というのをしているんですが、金沢に、「金沢市民芸術村」というのが一昨年できて、それがグッドデザイン賞をとりました。本来、とり壊される運命にあった旧い紡績工場のレンガ建ての建物をそのまま用いて、市民がいろいろな芸術活動をするためにつくられた施設なのです。そのコンセプトは“見せるより、使う施設を”ということをうたっています。「いかに使ってもらうか」にものすごい知恵と工夫がかたむけられてきた施設で、感激しました。具体的にどうしているかといいますと、「365日24時間オープン」という、すごいことをやっている。そのための管理の方法について、いろいろ知恵を絞って、今のところ何も問題もなく、よく活用されているとのことです。

直接、高齢者の方がどうということではないのですが、センター地区に何か新しい「使うためのいろいろな仕組み」を、１つでも２つで

もつくっていきたいと思います。

そういう意味では、例えば今年度から「市民が公共スペースに花を植え、それをみんなで管理していこう」という“つくばアーバンガーデニング”という活動が始まっています。「公共空間は、触れてはいけない。入ってはいけないものなんだ」という常識を突き崩して、「みんなで使うスペースにしていこう」という概念転換を図ったひとつの小さな事例ではないかなと思っております。つくばのセンター地区という狭い範囲ではありましても、いろいろな知恵と工夫が考えられるのではないかなと思います。

Ⅲ．具体的施策

1台のコミュニティバスから大きな成果が

蓮　見　「具体的にどんな施索が考えられるのか」について論議を進めていきたいと思います。時間の制約で、論議だけで終わってしまいそうですが、少しでも具体化につながるような提案型の話で終わりたいと思っております。ぜひよろしくお知恵をご提示していただきたいと思います。それではまた森岡さんからお願いします。

森　岡　この周辺の動向を見ますと、つくば市は今、高齢化率が12%です。地区によっては25%近いところがあります。これは周辺部が多いですね。旧谷田部桜は一桁台です。それで、要介護老人とか、痴呆の方の登録が、５%に満たない。とすると１万9,000人ぐらいの高齢者の中で、まだ元気でいろいろ活動なさる人が、先ほど市長がおっしゃいましたように１万7,000人。移行の段階の人も含めると１万5,000人ぐらいが、いまだ活力をもって地域で生活していると、とらえられます。

その人たちの行動を見ていますと、ほとんどが団体でレジャーを楽しんでおられるように思います。その足としては、今１番利用されているのがつくば市の福祉バスです。これは土曜日曜は稼働しませんが、本当に予約が殺到していて、前もって確保するのが大変な状況です。

またシルバークラブという団体が各地区にあります。つくば市では218グループで、ほとんど40～50人が登録しています。その数からし

ても1万人を越える人たちを、センター地区とどう結びつけていくかを私は具体的に考えました。

今さら足の確保について「路線バスが必要だ」といった、20年来繰り返されてきた議論をするつもりはありません。既に必要な人たちは、みな個人的に解決して、免許をもたない人は免許をとり、車が1台しかない人は2台持ち、個人的に対応を済ませてきました。

けれどもここで“高齢者”ということだけを限定して考えるならば、この福祉バスに代わるようなものが必要です。予約制の小さなコミュニティーバスといいますか、ローフロアーで10人余りが乗れるようなバスを1台用意していただければと思います。地域のシルバークラブの予約で、10時に地域に迎えにいく。そしてセンターへお連れして、3時にまた送っていく。そうすれば予約を1つ1つ果たすにしても、1年以上かかるほどです。実費を負担していただいたとしても、目を引くようなバスが走ったりすると大変楽しいと思います。

このセンター地区に、公園、美術館、図書館、公民館、そしてホールと、さまざまな利用施設がありますので、これを活用し、健康、あるいは保健衛生等について、30分くらい講義をする。その後3時まではこの地区で自由に過ごす。こうすれば、西武百貨店の中を「ある日は、○○地域のシルバークラブの人が闊歩して歩く」などという姿を夢のように思い浮かべることができます。

準備するものは、多少腰かけて休める場所、休憩所ですね。お年寄りが気楽に休めるようなコーナーで、お茶でも自由に飲めるようにしておけば、とても違ったまちになる筈です。その休憩所のパネルでは、元気で活動している高齢者の写真、筑波山の山野草の写真など、情報

も提供できるような空間にすれば、気楽に利用してくださるのではないでしょうか。

蓮　見　　どうもありがとうございました。「お年寄りがこぞってやってきて、充実した時間を過ごすことのできる足の確保や、ちょっとした休憩場所をまずつくっていきたい」というご提案だったと思います。それでは、小関さんお願いします。

民活を生かした普通車づくりを

小　関　　今の森岡さんのおっしゃったことはもっともな事だと思うのです。今、そういう気運がつくば市の中にあるのは確かです。ただ、デイケアという１つの施設があります。それは家族の方、ないしはデイケア施設で車で迎えにいって、その日１日お預かりする施設です。お預かりするという言葉をわざと使ったのですけれども、確かにお預かりするのです。というのは、必ずしも本人の自由意志でやってくる方だけではないのです。働き盛りの人たちが働きに出た時、年とった方々を家に残しておくことができないので、預けにやって来るのです。

そういう意味で、今、老人はいろいろな段階の人がいますから、ある程度自分で動ける人は、集団行動だけではなく、自分で動いて、ひょいと行って楽しめるところがやはり必要なのではないかと思います。あの福祉国家のフィンランドでさえ、今、いろいろな問題があり、困っていることがあるのですけれども、とにかく「自分の自由意志で行って楽しめる。しかも同じような年代の人と遊べるような場所が欲

しい」と思います。

それから、先ほどの言葉を間違えられるといけないので補足しておきますけれども、今、盛んに「在宅」「在宅」と言われています。でも日本のような極端な少子化社会においては、在宅というのは現実問題として成り立ちにくいのです。

在宅を受けることができる家庭は非常に裕福な家庭なのです。「人的資源がある、お金がある、家が広い、しかも誰かが家でその老人を看ることができる」という家庭です。いくら時々、在宅や在宅の支援者が来ても、１日中看ているわけではないし、１週間毎日看ているわけではない。ひとりでおくと徘徊してしまう人がいる。「その間を誰か看ている人がいなくてはいけない」ということで、在宅介護を受けることにより、ご老人方を生活させることは難しいことが多いのです。

それから、ボランティアの話がさっきありましたけれども、これは残念ながら外国と日本のボランティアの考え方の違いで、ボランティアが本当に根付くにはまだまだ時間がかかる、歴史が必要だと思うのです。しかしそれでは間に合わない。

そうするとある程度の年配になって介護を必要とする人にとっては、施設介護が基本になるしかありません。決して私は施設介護が最高とは思っておりません。もちろん皆さんが両女史がおっしゃったような、いろいろな意味で楽しんでいただければ非常にいいと思うのですけれども、現実問題として日本のご老人方の肉体的、精神的なレベルが年々下がって来ているのです。

そして、それらのご老人を引き受ける施設が満足でないので、働き手達が困っているのが現状です。そのようなお年寄りの方々を気楽に

預かってもらえるところ、気楽に預けるところが少ないのがつくば市の現状です。その意味で、老人ホームといっていいか、介護施設をつくば市は補助金を出すかどうかして、我々民間の人にやらせてもらいたいと思います。

今、在宅にしろ訪問看護にしろ、あまりにも行政とか公の機関がいじり過ぎているわけです。それで失敗したのがフィンランド、ノルウェーという福祉国家です。「これから10年先はどうしていいか分からない」とヘルシンキ市の福祉部長でさえ言っていますから。

ですから民衆の活力、財政的な活力がないと、結局つくばは何もできなくなってしまいます。そういう意味で我々民間のもの、またそういうことをしたいという人、する能力のあるものに、どんな形でもいいから援助してくれて、どんどんできるようにしないと、つくば市もこれから増えてくる老人に対応しきれないことは目に見えていると思うのです。

今日はせっかく市長がいらしているわけですから、ぜひお願いしたいのは、国鉄が失敗してＪＲになった途端に単年度では黒字になったように、サービス産業というのは国とか行政があまりいじり過ぎないように、「もう少し民活を助けて欲しい」ということです。これは施設をつくると同時に民活という一石二鳥ですから。そういうことを考えていただきたいと思います。

繰り返して言いますけれど、私は在宅看護ができれば最高だと思います。しかし、在宅看護が実際問題としてできないのが現状だと思います。介護保険にしても、うまくいってくれれば非常にありがたいですけれども、「うまくいかないだろう」と、言われているのが現状で

す。なんとかもうちょっと地についた施策をして欲しい。最低レベルのご老人はそこで確保できる。もう少し上の人はそれなりにいろいろなことを楽しめるという形を作らないとダメだ、と私は思います。

蓮　見　　ありがとうございました。小関さんのご提案としては、「何らかの形で民活をいかした、介護施設をもっと積極的につくっていくべきではないか」という、ところですね。全体として、「基本的に深刻な状態に置かれている人にまず注目し、そこをどうしていくかをきちんと押さえたうえで、さらに元気なお年寄りへと発想を広げていくべきではないか」というお話だったと思います。

小　関　　まずグリーン車ではなくて、普通車をつくってですね。グリーン車は個人でやるべきではないかなと思います。どうもグリーン車ばかりに皆さん気を取られている、と思うんですね。もうちょっと基本的なことを前にやらないといけないと思います。老人問題というのは本当に目の前まできているわけですから。

蓮　見　　わかりました。それではルイス·ロバートさんお願いします。

交通、相談、啓蒙システム

ルイス　　第3ラウンドはできるだけ具体的な話をする必要性があると思いますので、3つのキーポイントに絞りたいと思います。

ひとつはセンターでそういう施設ができても、その人たちがそこま

で来られるかどうかという問題があると思います。まず車は運転できないということを前提に考えた方がいいと思います。できる人もいらっしゃいますが、基本的にできないと考え、バスで来られるかどうかとか、その辺の交通システムを考えると、ひとつ提案したいことがあります。

今年、シカゴでＰＲＴ2000というシステムの建築がそろそろ始まります。これは４人乗りの自動運転の交通システムです。電気自動車は日本のものですが、小型のトラックで、切符を買った時点で、今いるところから目的地までノンストップで行きます。非常に効率のいいやり方で、アメリカらしいですね。車椅子に乗っている人が前提でこの車は作られ、簡単に外に出られるような仕組みになっています。

従来のバスとか、タクシーとか、車のような交通システムは体が不自由な人、年上の人たちには合っていません。だから、もう少し、つくばらしい交通システムが必要だと思います。

２つ目は、センターを中心に考えたら、どういう名前がいいかちょっと分かりませんが、考えているのは“ゴールデン相談センター”です。つまり、これからいろいろな問題、経済的な問題が間違いなく出ますので、その人たちが困っているときに、やっぱり相談が必要だと思います。

例えば健康。病院に行ったら、詳しくいろいろ健康指導を受けることができますが、「ちょっと問題があったのですけれど、どう思いますか？」と気楽に尋ねられる相談センターのようなところが必要だと思います。

あるいは、どうしても老人ホームに入らなければならないとき、

「どこの老人ホールがよく、どこが悪いか」、そして「どれくらいお金がかかるか」、多分、知らないことが多いでしょう。年配の人だけでなく、面倒を見ている若い人たちまで、分からないことが多いと思います。

信頼のおけるところで、気楽に相談する必要性があると思います。亡くなる前にいろいろあるかも知れないし、法律関係について気楽に相談できるところも必要です。

または、ボランティア活動もいろいろあります。例えば、「買い物ができない」「子供がいない」「困っている」などです。アメリカでは食べ物を代わりに買ってくれるボランティア活動もあります。いろいろなボランティア活動をまとめて紹介したり、支援したりする、そうしたセンターもあればいいと思います。だから、簡単に言うとゴールデン相談センター、ここのセンターにつくれば意味があると思います。

もうひとつは、やはり研究学園都市ですので、一般的に日本では少ないと思いますが、博物館のような、ちょっと変わった表現かもしれませんが、例えば“エイジ理解センター”というようなところを設置するのです。

つまり歳をとったらいろいろな現象があるでしょう。アメリカでは若い人たち、例えば、12歳になるときに、学校では「もうそろそろセックスの時期に入る」と、各種のコースがあり、教えてくれます。けれども卒業してからそういうような、支援になるような相談や教育がありません。にもかかわらず、それぞれの自分の人生の中の段階では変化がいろいろ起こっています。

つくばでも、センターにあるエクスポセンターですか、サイエンス

のような雰囲気で、「年取ったらこういう現象が起こる」「大体この年齢でこれがある」とか、若い人でも、年配の人たちでも理解できる。あるいは、いろいろなテスト、ヒヤリング、エクササイズ、クラブなど、そういう活発な前向きのセンターもあればいいなと思います。

だから、「交通関係」「その相談関係」「年取ったらどうなるのか」どうしたらいいのか、という半分遊び半分教育のような施設、その3つができたら非常にいいなと思います。

蓮　見　　ありがとうございました

小　関　　「エイジ相談センター」ですか？

ルイス　　いいえ“エイジ理解”つまり、歳をとることを理解する。若い人も理解する必要性があると思います。本人も「ああこれだったらおかしくない」と分かるような、いろいろ教育関係のことができればいいなと思います。

蓮　見　　人間理解というところですね。

ルイス　　そうですね。「年をとったらどうなるか」というようなことです。

蓮　見　　分かりました。先ほどシカゴのＰＲＴのお話がありましたけれども、こういう話題になると、私は専門に近いのですぐに口をはさみたくなるんです。ドア・トゥ・ドアの便利さは、何といっても自家用車に勝る

ものはないのだから、「すぐ使えるから便利だ」と、みんなが大きな車を１家族１台なり２台なり持って乗りまわしています。しかし、これは無駄も大きいのであって、本来は「呼べば来る、行きたいところに連れていってくれる乗り物があれば１番いい」ということになりますね。ＰＲＴは非常にアメリカらしいチャレンジャブルな新交通システムの提案かなと思います。

それから“ゴールデン相談センター”。これはなんでも相談に乗ってもらう情報のセンターというものでしょう。

ルイス　そうですね。健康のことから、法律、ファイナンスなどまで。

小　関　これはすでに特許がある問題ですか？　今、ロバートさんがご自分でお考えになったことですか？

ルイス　はい。私が考えました。センターで何かしようと思えばそのぐらいが必要だと思いますよ。

小　関　そのアイディアいただいていいですか？

ルイス　どうぞどうぞ。誰かやってください（笑）。

蓮　見　再度確認したいんですけれど、“ゴールデン相談センター”というのは、アメリカにこういうものがあるということではなく、ロバートさんがお考えになったオリジナルなものなのですね？

ルイス　私は最初に“老人相談センター”と書いたのですが、それはよくないなと思いました。

小　関　ゴールデンがいいですよ。シルバーというのは非常に暗くて嫌なんです。シルバーという言葉は使わないようにしているのです。

ルイス　アメリカでは“ゴールデンエイジ”とよく使われます。いろいろな意味でゴールデンが非常に合っていると思います。

蓮　見　最近、プラチナプロジェクトというのもあるし、イメージにつながる呼称は大切ですね。

ルイス　それでは、引き続きおそどさんにお願いします。

人にやさしい情報ガイド

おそど　第2ラウンドで随分たくさん言ってしまったので、あとはいろいろお見せします。私は観光、旅の分野でずっとつき進んでいますので、福祉の分野ではないわけですけれども、「これからの時代は福祉と旅を一緒に考えていく必要があるだろう」と思います。私はどちらかというと「元気なシニア」「元気な障害者」と一緒に旅をしているわけですが、ここで提案したいのは、地図や移動、情報の整理をするといいと思うんです。情報整理というと、たとえばパソコンですとか、先端のほうの情報整理に走ってしまいがちですけれども、実はやっぱり

パーソナルな情報整理がとても重要であると思います。

ここに持ってきたものが完璧ではないんですけれども、たとえばの話ですが、サンフランシスコの『トイレガイド』いうのがあります。簡単に手書きで書いてあるものですけれども、「これを１冊持っていれば、サンフランシスコでトイレを必死で捜し回ることは必要ない」と思います。

それから、これは『レッツ・ゴー・ガイド』で、昔は厚いガイドブックだったんです。最近は前のほうに地図がついていて、まん中に必要不可欠な情報が入っています。例えば先ほどのゴールデン情報センターなどがあれば、そういうデータをしっかり入れたガイドを作ればと思います。何処からどんなバスが出ているか、リフト付きなどの発着情報を入れ、つくばのセンターの中の遊歩道マップなどを入れ、「段差が１段ある」とか、「こっちから回ると段差なしで行けるよ」とか、きめ細かく地図をつくることができたら、かなりみんなに役立つのではないかと思います。

いろいろな国に行きまして、びっくりすることがありますけれども、シアトルというまちのことです。あそこは坂の多いまちでしたけれども、「こういう坂の多いまちをお年寄りや障害を持った人はどんなふうに暮らしているだろうか？」と疑問を持ちまして、観光局にまいりました。観光局で「何かお年寄りむきの地図、あるは障害を持った方向きの地図はないのか？」と聞きましたら、市の交通局が出している地図がありました。

まちのまん中だけの地図でしたけれども、４つ角のところに、矢印がついているのですね。それでスロープがどっちの方向にあるかかい

てあったり、建物の中を点線が通っておりました。「これは何だろう？」と、その地図を持っていきましたら、坂のまちですから、車椅子の方が下の１階から公共の建物に入りまして、エレベーターで３階まで行き、３階から坂の上の方の道に出ることを示す地図になっておりました。大変感激いたしました。

日本の場合、各都道府県から福祉課と観光課から地図を手に入れましたけれども、福祉マップは福祉マップ、観光マップは観光マップとみんな別々につくっております。しかし、これからは観光地図の中に福祉の部分も入れてひとつにしていかないと使えないのではないと思います。

イギリスのオックスフォードになかなかいい地図がございました。今日は持ってこれませんでしたけれども、車椅子のルートもオレンジ色で書いてあって、一般の人の地図の中に車椅子トイレの位置もちゃんと書いてありまして、どうやって入るかというアプローチの矢印も書いてある地図がございました。「そんな地図をつくられると楽しいまち歩きができるんじゃないかな」と思います。

蓮　見　　地図やガイドブックというような情報の仕掛けですね。「海外では結構行き届いている」ということがお話の中にありました。そういう目でつくばをみますと、確かに戸惑う部分は多いのではないかなと思いますね。それでは藤澤さんお願いします。

安全性と“巷”性

藤　澤　　私はセンター地区の整備にあたっては、まず安全でなければならないと考えます。ここを訪れた方々が交通災害、あるいは犯罪の危険からしっかりと護られる。あるいはそこから享楽的な風潮が蔓延するようであっては絶対にいけないと考えております。

先ほど申し上げましたように、「わがまち、私たちの広場なんだ」というような雰囲気が醸し出せるような空間というのをぜひつくっていくべきだろうと思います。整備にあたってのキーワードは、先ほどもお話がございましたが、土であり、緑であり、やはり水であろうと思います。ただ、センター地区だけがそうなればいいということではなく、そこを取り巻く周辺の住宅の再開発も当然やっていかなければいけないだろうと思います。

私たちが子供のころに口ずさんだ歌に「私はまちの子、巷の子、窓に灯が点る頃、何とかの道を歩いていく…」そんな感じのフレーズがあったと思うんですけれども、やはりまちには巷というのが当然必要なんだろうと思います。道路にしても、子供やお年寄りにとって最も安全なものをつくるべきでありましょうし、そこには子供たちにとって遊び場になるような空間というものが当然必要でしょう。そういうところから高齢社会を担っていけるような人間性豊かな子供たちが成長してゆくのではなかろうかと私は考えております。

蓮　見　　ありがとうございました。「わがまちといわれる人間性豊かなまち

づくりという方向をめざして、安全第一を考えて」ということでした。

体の老いと心の老いに沿ったちょっとした工夫を

私がお話しさせていただく番になりましたけれども、ひとつ考えてみたいのは、「つくばセンター地区」という今日の課題といいますか、テーマというのは、どうして出てきたのかなということなのです。私なりに解釈していきますと、今までのいろいろな物づくりは、「あるエリアを決めてゼロからつくり上げていくことをしてきたのではないか」と思うのです。

おそらく高齢者を視点に置いた、高齢者が住みやすいまちづくりは、どこかのニュータウン構想の中に取り込まれてゼロからやっていけば、確かにいいものができるかもしれない。

しかし、日本のほとんどのまちは、すでにインフラがつくり上げられてしまっている。ということは、すでに存在している古い形のまち、それぞれの時代にかたちづくられたまちを前提に、高齢化に適応して変えていけるノウハウの構築を、いろいろなタイプのまちや地区で実験的に行なっていく必要があるのではないかと思います。

このつくばセンター地区は高度成長で勢いのあった時にできた典型的な都市計画型の都市ですよね。そこは良くも悪くも人工的なまちと呼ばれるのにふさわしいスケールと構造を持っていると思うのです。

そこに対して今、高齢社会が問いかけているのは、「そういう人工

的なまちをいかに人間的なまちに変えていけるのか」という課題だと思うのです。そういう意味ではすでにある構造をあまり大きく変えるのではなくて、ちょっとした工夫をいろいろ実践しながら、「ほら、こんなに変えることができるんだよ」という成功例を示していきたいと思うのです。

では、具体的にどういうことを考えなくてはいけないのかといいますと、私の考えは２つあります。小関さんがおっしゃった、１番深刻な高齢者の方を考えた有効な方策が最も重要度が高いとは思いますが、私は大きく交通の問題と情報の問題から捉えていきたいと思うのです。

私ももう51歳ですので、そろそろ老眼は進むし、五十肩になったり、もの忘れをしたりして、老いを感じはじめた年ごろなんです。まず、ひとつは体の老いの問題があります。それは「人間の行動の意欲をだんだん削いでいく部分なのではないか」と思うのですね。やはりいつまでも活動的に外に出かけ、いろいろな活動をして家に帰ってくる。「そういうことを日々やっていくことができる形を支援していく仕掛けが必要なんじゃないかな」と思います。

先ほどロバートさんがＰＲＴのお話をされましたが、私はそういう基本インフラを考えていくことも大事なんだけれども、もうひとつ大事なのはトランスファー（乗り換え）のしやすさだと思います。たとえば車でセンターに来て、つくば都市交通センターさんの駐車場に止められた。だけど左右のスペースが狭くて、あるいは隣の車がヘタな駐車をしていて、「ドアがちょっとしか開かない、出られない」、また「出たのはいいけれど、雨がジャージャー降っていて、どうしていい

か分からない」というようなことです。そういう細部での配慮がうまくつながっていけば、どんなレベルの人も安心してこのセンター地区の中に来ることができるわけです。「いったんセンターまで車で来たら、後は比較的自由に移動できるよ」というきめ細かい仕掛けをつくっていくべきではないかなと思います。

もうひとつは情報ということです。これは体の老いの反面にある、心の老いというものに関係すると思います。人間の心が老いていくとだんだん孤立していく。頭脳の活動がだんだん弱ってくるからかもしれませんが、とにかく情報が少なくなってくるわけですね。その辺の情報をいかに支援し豊かにしていくか。

それを考えますと、「何か知りたいこと、あるいは何か困ったときにはとにかく、あそこに行けば、とりあえずはすべて分かる」という場所をつくる必要があるのではないか。知りたいことがあって、どこかに出かけると「それはうちじゃない。あっちに行ってくれ」ということでは、高齢者は意欲をなくしてしまうでしょう。

交通と情報ということをひとつに束ねて高齢者のためのセンターを企画し、既にある基盤インフラに埋めこむ。最初は小さいスケールかもしれないけれども、試行錯誤しながら、徐々に活発化させていく運動があっていいのではないかと思います。

ひとつひとつの対策を生真面目に考える基本スタンスは大事ですけれども、今日のみなさんのお話の中から私が学んだのが、エンターテイメントということの大切さです。すごく楽しく気楽に出かけられ、何かを享受できるような仕掛けが必要なのではないか、と思います。

これは私がはじめてマッキントッシュというパソコンを使ったとき

に実感したことなんですけれども、マウスという新しい装置に慣れさせるために「上海」というゲームソフトが付いていて、これで遊んでいるといつの間にかマウスの使い方が身につくわけですね。そういったエンターテイメント性を考えてみる必要があると思います。

これまでは、すべての仕掛けづくりを行政や専門家におまかせでやってきたような気がしますが、これからは、つくばに住む市民の力をできるだけ有効に使って活性化していく仕掛けが必要なのではないか、と思います。そういう意味では「あそこに行けば何かできるかもしれない」という、センター機能は大事だと思うし、それが広告機能として、つくば全体に広がっていく――どなたかシンボル的とおっしゃいましたけれども――そういう役割を果たせるのではないかと思いました。

最後にせっかく集まったわけですので、質疑応答といいますか、5分でも10分でもディスカッションができたらいいと思いますけれども、何かご発言はありませんでしょうか？

森　岡　今、医学の目標も、「寿命をこれ以上長くしていく」ということよりも、「元気で長く生きられる状態をどれくらい継続できるか」に目標が絞られてきているといいます。それと同じように、このセンター地区にかかわりを持っている総ての人が、高齢者が元気で人生を楽しく生き生きと過ごせるように、工夫したり考えたりするということが、必要だと思っています。

ボランティアの人たちも、もう10年以上「陽だまりの集い」というのをしています。特に学園地区は“呼び寄せ老人”といいますか、子

供のところに寄留するという形が多くなり、孤立してしまうケースもあったので、老人福祉センターに集まってにぎやかに過ごす集まりを続けています。

ささやかなことですが、何かそれぞれの立場で、楽しくできる時間を長く維持できるようなことを考えていかなければいけないと思っています。

蓮　見　ありがとうございました。時間にもなりましたので、そろそろこの辺で終了したいと思います。

いずれにしろ、まちというのは、１人１人の人間が、基本的には生まれて、育って、死ぬ場所なんだと思うんですね。そういう意味では1人の人にとってその人が住むまちというのは非常に大きな意味を持っていると思います。

これからの時代、小関さんが、ルイス・ロバートさんが指摘されたように“大変なこと”が控えていると思うんですけれども、市民の人たちも含めて、多様な立場から多くの人の知恵と参加を活かして、「できるところから次々に何かの試みを進めていくまちづくりができたらいいな」と思います。

まちというのは今まで、作り手、たとえば行政に任せていた部分があったと思うんですけれども、「住み手の知恵をどう活かしていくかがこれから非常に大事になっていくのではないか」と思いました。

今日は大変長時間論議をしたんですけれども、残念ながら具体的に「そうだ！それはいいね」という形で、論議が収束したところがちょっと少なかったかなと思います。これは座長のいたらなさとい

うことでお許しいただきまして、今日のざっくばらんな論議がこれからまちを、つくばを、センターを考えていく契機になっていけばいいと思います。まだ話し足りない部分もあるかと思いますが、これで終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

座談会
つくばセンター地区における高齢社会に向けた
環境の形成について　TUTC Library—26

発行日　平成11年6月
発行人　大白　幸夫
発行所　財団法人　つくば都市交通センター
〒305-0031　茨城県つくば市吾妻1丁目5-1
☎0298(55)7211　FAX0298(56)0311

非売品

ＴＵＴＣライブラリー　一覧

1．（シンポジウム）つくばの交通問題を考える

2．（レポート）つくばのバス輸送のあり方

3．（シンポジウム）つくばのバス交通を考える

4．（レポート）つくばセンターの駐車場利用調査

5．（レポート）つくばの交通に関するアンケート

6．（シンポジウム）つくばの交通をどうするか

7．（座談会）地方都市と交通――つくばの問題を中心として――

8．（市民レポート）自転車のあるつくばの楽しい生活

9．（座談会）筑波研究・学園都市の草創期を語る

10．（座談会）つくばのショッピングセンターのあり方
――21世紀の都心形成の展望

11．（座談会）つくば南１駐車場をめぐって

12．（レポート）つくばのバス輸送のあり方Ⅱ

13．（座談会）常磐新線と土地問題――今なぜ大規模宅地開発か

14．新しいつくばの歴史　　中学生社会科用副読本

15．（座談会）常磐新線と地域開発――つくばを中心に

16.（座談会）新しいつくばと研究者

17.（座談会、レポート）つくばの交通事故

18.（座談会）これからのつくば——長ぐつ時代の市民が語る

19.（座談会）つくばと情報革命——21世紀つくばへの提言

20.（基調講演、シンポジウム）街づくり“構想力とその推進”
——“都市開発プロデューサー”の役割を探る——

21.（レポート）つくば・土浦の交通に関するアンケート

22.（座談会）21世紀に向かっての“つくば”を考える
——産・官・学・民「共生」への課題と展望——

23.（新春座談会）21世紀に向かっての“つくば”を考える
——つくば・・・・今、何を目指すべきか——

24.（座談会）茨城県南西部地域における将来の交通について

財団法人 つくば都市交通センター　〒305-0031 茨城県つくば市吾妻1丁目5−1　電話・0298−55−7211［代表］